

ビニールの城

唐十郎

●登場人物

朝顔／森田 剛

モモ／宮沢りえ

ター／荒川良々

管理人／石井愼一

もう一人の腹話術師／金 守 珍

バーテン／大石継太

引田／六平直政

河合／金 守 珍

リカ／江口のりこ

鳥丸／鳥山昌克

水丸／柳 憂 怜

糸丸／広島 光

屋台を引くおばさん／三浦伸子

人形売りの男／石井愼一

一人の客、四、五人の客、人形たち／

塚本幸男、澤 魁 士、

松田慎也、申大樹、

八代定治、染野弘考、

小林由尚、渡会久美子、

プリティ太田、赤星満、野澤健

(7月末時点)

## 一幕

### 第一章 何故、彼はそれを探す気になったか

煎餅布団がいくつも敷かれてある。そこに、眠れないで座っている腹話術の人形がいる。足をくずしたのや、正座している物、枕に倒れかかっているのなど……。ぐったりと横たわっているのも、あちこちに。淋しくて、五、六体、肩を寄せ合っている物。片腕のないのや、片足で立っているやつ。そこは、彼らの、はきだめ横丁だろうか。踏まな  
いように二人の男入ってくる。懐中電燈を持った人形の管理人と、元、腹話術師、朝顔である。

管理人

ざっとこんなもんですが……。

朝顔 はい。

管理人 預けたのか、捨てたのか、どちらです？

朝顔 預けたんです。

管理人 ハカ月もですか。

朝顔 ちょっと事情がありました。

管理人 ふむ。(と奥へ)

朝顔 それ、ちょっと似ています。

管理人 似てるってよ。(と一体のあごをひねる)

朝顔 すみません、やはり違います。

管理人 腹話術の人形なんて、みんな、赤鼻にギョロ目ですから。

朝顔 夕顔って言うんです。

管理人 あんたは？

朝顔 朝顔。

管理人 鳥丸に虫丸なんてのもあったけど。

朝顔 タちゃん。(と見回す)

管理人 (ズカズカ歩いて) 僕とおいらとか。

朝顔 どっちが僕で、どっちがおいらなんですか。

管理人 さあね。他にも、僕と僕とか、これは、こんがらがって、仕事にならなかったそうですよ。

朝顔 あれ、ちょっと見せて下さい。(と奥へ)

管理人 ご随意に。

朝顔 違ったか。ごめんな、君。(と人形を戻す)

管理人 結局、あなた捨てたんでしょう？

朝顔 いえ。

管理人 でもね、ここは腹話術の人形の施設じゃないんですよ。二、三日預けると言う人もいるけど、みな、こんな芸に見切りをつけて、感傷的に捨ててくだけなから。

朝顔 僕は捨てたんじゃないんです。お互いに冷静になるために、一度離れて暮らそうと思って。

管理人 人形は常に冷静でしょう。

朝顔 僕の場合、タちゃんとは、常に冷静に相対すわけじゃありません。

管理人 人形ってのは、あんたらの声で生きんだらう？

朝顔 そうですが。

管理人 冷静でなくなるのは、いいかい。

朝顔 はい。

管理人 あんたの腹ん中から出る声が、冷静でないだけだつ。

朝顔 そう、自らにも諭さとしました。

管理人 だから、いいじゃないか。これくらいで。

朝顔 え？

管理人 どれでも、好きなの、持ってゆきなよっ。

朝顔 そうはゆきません。

管理人 そうは言うけど、こっちだって、いつまでも、こうはゆかんよ。

朝顔 タちゃあん！

管理人 あなたがたは幸せだ。

朝顔 ごめんよ、タちゃあん。

一人の腹話術師、入ってくる。

一人の腹話術師 (抱いていた古い人形をぶん投げる)

朝顔 ?

一人の腹話術師 (傍にある別のを抱いて) おじさん、僕を使ってくれよ。(と人形の声で言う) そうだな。この唇をパクつかせる蝶番をちよっと調べて見んことにな。なんだ、こりや、錆びついて、ガタもきてるぞ。(人形の声で) でも、愛嬌は、抜群だからさ。(師の声で) 甘ったれるな、このやろう。(と投げる) こっちのはどうだ。(と別のを抱く) おい、皆さんにアイサツしろい。(人形の声で) 浅草の皆さん、今晚は。(師の声で) ここに来てんのは、浅草人種か？(人形の声

で) ヨソモノの皆さん、今晚は。(師の声で) ともかく、(人形の声で) こんな僻地によく来たなつ。(師の声で) 口が悪  
いぞ、このやろうつ。(と投げる) こいつはどうかかな?(と別のを抱く) おい、何かしゃべってみろつ。(人形、しゃべら  
ない) 口結んでやがんな、それはお前の意志なのか、おいっ。(と片手で、口をこじ開ける) だめだ、こりゃ。ただのポン  
コツ。(と投げる) まあ、この平凡中の平凡と見た、こいつをもらおう。(と一体をひっさげ) 親爺、こいつをもらってく  
よ。(と五千円札投げて行きかける)

朝顔 待って下さい、その人。

一人の腹話術師 おれかい?

朝顔 ひどいじゃないですか。

一人の腹話術師 なにか?

朝顔 買い方が。

一人の腹話術師 おまえ、気違い朝顔だな。バザーの演芸会で、人形と喧嘩した――。

朝顔 僕のことはどうでもいんです。

一人の腹話術師 混乱した頭で、きさま、人のことをとがめられんのか?

朝顔 あなたの扱いはひどいし、それに。

一人の腹話術師 なんじゃい。

朝顔 買い方がイージーです。

一人の腹話術師 イージーのどこが悪い?

朝顔 あなたは、イージィで尻をまくるんですか？

一人の腹話術師 てめえの相手なんか出来つかよ。

朝顔 (回り込み) 人形は遠くからきたんだ。

一人の腹話術師 俺は近くに住んでるよ。

朝顔 近くにいればこそ、遠くから来た人を、もっと大事にすべきでないのか？

一人の覆話術師 このやろう、変な遠近法を使いやがって。

朝顔 おねがいます。遠くから来た人をそまつにしないで下さい。

一人の腹話術師 そんなに人形を大事にすんなら。

朝顔 分っていただけましたか？

一人の腹話術師 分んねえよ。ただ俺の言いてえことは――。

朝顔 はい、はい。

一人の腹話術師 同業者をもっと尊たつとんでもいんじゃねえか？

朝顔 ワタクシ、人形よりも、あなたを尊んでいませんでしょうか？

一人の腹話術師 だって、そうじゃありませんの。

朝顔 そんなことありませんわよ。(もみあげをさわる)

一人の腹話術師 俺のモミアゲにさわんじゃねえっ。

朝顔 だって……。

一人の腹話術師 俺が、何を、どう買おうと、てめえに、とやかく言われるスジはねえんだ。親爺、今日はこれをもらってくぞ。

朝顔 今日は、それをもらってく?

一人の腹話術師 どけ、どけつ。(と人形を蹴ってゆく)

朝顔 昨日は、それじゃ、何をもらってったんだ?!

一人の腹話術師 てめえに貸す耳なんか、もうねえよ。

朝顔 おととい、先週、そうして持ってたその中に、もしや、タちゃんはいなかったでしょう?!

一人の腹話術師 タちゃん?

朝顔 笑うと、口の中から夕顔が咲き伸びる?!

一人の腹話術師 ああ……。

朝顔 ああ?

一人の腹話術師 ただ、ああと言ったまでよ。

朝顔 その夕顔は、口の中から、夕方に向って、どこまでも伸び。

一人の腹話術師 親父、こいつ、とめてくんよ。

朝顔 もしも、僕とはぐれたことがあったら、朝顔さん、夕方の底をさがすんだよ、僕は、その夕方の底で、仰向けに寝て、

口から夕顔を咲かせているからねと言った、そんな人形!

一人の腹話術師 親爺っ。

管理人 もうすぐ中断されますよ。

一人の腹話術師 今、あることが、中断される？

管理人 この人は――。

朝顔 話を中断させないで下さい。だから、おじさん、そういう人形なんです。

管理人 三杯飲めば、こうなりますよ。

朝顔 はぐらかさずに聞いて下さい。

管理人 はぐらかさなきゃ、持たんでしょう、電気ブランを飲みすぎたんですから。

朝顔 電気ウナギじゃあるまいし。

管理人 人形も心配してます。電気ブランの飲み過ぎだって。

寝ていた人形も、起きて、一斉に口開く。

人形たち 電気ブランの、飲み過ぎですよ。

布団の中に共に寝ていた黒い腹人間が、この何十の人形の口を開かせる。

朝顔 (見詰めながら後ずさる)

管理人 それにこうも思っています。

朝顔 誰が。

管理人 人形と。

朝顔 ——え？

管理人 この都会で眠る無数の、腹の中の声。

朝顔 僕にか？

管理人 今さら、なぜ、それを探すのかって。捨てた筈の遠くから来た人を！

朝顔 ——違うんだ、夕ちゃん。（と人形を見る）

管理人 さあ、こいつの夢を押し返せ！

人形たち 電気ブランの飲みすぎですよ！

朝顔 そうじゃないんだ、夕ちゃん！（と後ずさり、変なカウンターに背が当たる）

人形たち 電気ブランの飲みすぎだって！

朝顔 そんな僕が見えんのか？ それを飲んでる僕の姿が！ それじゃ、それを飲み、いつまでも君をさがすよ。

人形たち ——。

朝顔 飲むよ、夕ちゃん。（とカップをカウンターの上で掴む）飲むからね、夕ちゃん！（とあおる）

あおった電気ブランのコップには、百本の電線が走っていて、宙から伸びたその電線の中枢にカップがある。液体が

喉に入った瞬間、電流が走り、朝顔の体は、電気に感電して、ケイレンを起こす。左右に、すべるように、人形をのせた布団が去る。ケイレンした朝顔は、カウンターの奥からバーテンに、羽交い締めになされ、無理やり、コップの水を飲まされる。

## 第二章 覚めた彼がそこに見たもの

さわさわと、吹き込む風に、彼がいる場所が見えてくる。風にさわさわと打つのは、水の波。ここは、「カミヤ・バー」だが、下手の床が、いつの頃からか沈下して、そこに、どこからか、忍び込んだ水が溜っている。右手にはカウンター。左手にはボックス、チェアがあるが、その足元には、深さ10センチ程の水がたまって、右手に近い、中辺りで、浅くなっている。枯れたつたが絡まり、どこか、水につかった「文庫屋」にも似ている。それとも、埋められた瓢箪池の底だろうか。

上手のドアを開けて、新聞紙を頭にかざした女が現われる。ネンネコで子供を背負っている。長グツ（赤い）をはき、腰には金魚鉢が結びつけられ、その鉢の中の水には、小魚（メダカ）が泳いでいる。

バーテン タちゃんはどうしたの？

女 ちよっと風邪で。

バーテン 今月、店に出てこれたのは三日ほっきりじゃない。(とカウンターから出てくる)

朝顔 (覚めた目で見ている)

女 子供の頃、肺炎をやったそうで……。

バーテン そういう説明を聞いてたら、店開かないんだよ。

女 宅の責任は、あたしの至らないところです。

バーテン いつ、出てこれんの。

女 え？

バーテン 御主人は、いつ店に出れんのさ。

女 そうですね。

バーテン そうですねって、ちょっと頼りないんじゃない？

女 ちよいと、あそこ、座らせてもらってよろしいでしょうか。

バーテン まあ、混んでないし。

女 じゃ、(とゴム長で水の中に入って、ある机の前に座る) どっこいしょ。

バーテン あんたら、何かあるんじゃないの？

女 あんたらって？

バーテン あんたらったら、あんたらだよ。

女 あたし、そういうの分らないんです。

バーテン 夫婦以外に、あんたらがあんのかい。

女 (相変らず、新聞紙かぶって) 単に夫婦のことですが。

バーテン あんたと月の関係を、あんたらって言うか？

女 あんたらって言われると、あたしとラッパとか、あたしと、誰かのおならとか考えちゃって……。

バーテン 人間だよ、人間。

女 もう分りました。

バーテン 男と女だよ、男女！  
だんじょ

女 たんと分りましたって。

バーテン こういう、まぎらわしい話になっちゃうんだもの。きっと、あんたら、もっとまぎらわしいんじゃないの。

女 いえ、ツーカーです。

バーテン それじゃ、言うけど、この間、たちやんと、おしゅうとめさんと、あんた、この店に来ただろ。

女 まかりこしました。

バーテン その時、カウンターで、仲良くやってたね。

女 いいお母さんですから。

バーテン あんたを中に置いて、将来の生活設計に顔をほころばせてたろ。

女 将来は明るい。

バーテン あたしも傍で聞いてて祝福したい気持だったよ。

女 してね。

バーテン してねって、その時のあんたのしたことは何なんだい。

女 良い子ね（と背中をゆする）。

バーテン しあわせ幸福の話をしてる時に突然、あんた、サラダを盛ったマヨネーズの中に顔突っ込んだじゃないか。

女 すみません。

バーテン お母さん、びっくりしたよ。タちゃんだって。あんた、マヨネーズの中から顔をあげて、「あたしをつかまえてて」と言ったんだから。

女 「あたしをつかまえてて」って？

バーテン マヨネーズの中に顔つっこんだ女を、どうつかまえればいいんだい。

女 （金魚鉢を机の上に置く）まあ、そういうこともありましたけど、ここで、おじさん、あたしを働かしてみちゃ、いかがでしょうか。

バーテン 急に、また何言うんだい。

女 あの人も、ふさぎ込みっぱなしだし、あたし代りに働きますよ。

バーテン 新聞紙かぶって、子供背負った女をか？

女 これ、目ざわりなら、とりますけど……。

バーテン とれ、とれ。

女 でも、タちゃんが、なるべく男に顔見られるなって言うから。

バーテン そうか、おまえらは、コーランの徒やからなのか。

女 ううん、無神論者。

バーテン それなら、ヴェールは無用だろ。

女 でも、夕ちゃんが、男の目が、どうささってくるか分らないって言うんだもん。

バーテン しかし、ここは飲み屋だぞ。

女 だから、働かしてくれるならとりますよ。

バーテン とんな。

女 じゃ、御泰仕さしていただきましょうか。

と、とる。

バーテン その付けマツゲ、長すぎないか？

女 少女フレンドの子みたいにしたくて。

バーテン 口紅は濃コーだな。

女 エへ、エへ。(と頭をかく)

バーテン 酔った目には、イケルだろ。

女 覚めた目にも、ハッとさせます。

バーテン 俺が、もう少し若かったらなあという気持ちにさせなくちゃいけないよ。

女 努力します。(と髪をたてる)

バーテン 子供は何とかなんないか？

女 お腹の方に抱いてみようか。

バーテン それじゃ、妊婦みたいになるだろ。

女 それじゃ、肩車にしてもいいけど。

バーテン 子供を肩車にして、客におしゃくすんのか？

女 おかしいか……。

バーテン 待てよ、あんた、たちちゃんと一緒になったのは八カ月前だよね。

女 ええ。

バーテン その前に付き合いもなく、拾われたんだな。

女 ゴミじゃないけど。

バーテン そして、次の日から子供背負ってるんだよな。

女 あ、お帰りのよう——。

朝顔立ち上って、金を置く。

女 (ゴム長で水を切って近づく) 今、オツリ出しますから。

バーテン 電気ブランを三杯だ。

女 (カウンターの上のレジから三千五百円のツリを掴み) お足元に気をつけて。

朝顔 (いくらか、ひざをとられて、手を出す)

女 大丈夫ですか。

朝顔 ええ。(と手を出す)

女 (ツリを持ったまま引き) なにか？

朝顔 別に。

女 なにか、言いたい目だと思ったんだけど……。

朝顔 そんな目を僕しましたか。

女 あとで、松屋の前で待ってるぞとか。

朝顔 僕は女たらしじゃありません。

女 あたし、そういうつもりで言ったんじゃないんです。

朝顔 じゃ、この目が、どんなふうになを誘ったと言うんです！

女 そんなに怒るなら、誘いませんでしたよ。

朝顔 (ツツと行ってドアを開ける)――。

女 またのお出でを。

朝顔 (振り返る)

女 なにか？

朝顔 おツリ。

女 あ、あなたさまの。(と渡す)

朝顔 (それを持って戸外を見) 霧が出てきてる。

女 マスター、霧よっ。

バーテンはマスター 霧がなんだ。(とカウンタ―に入る)

女 キリキリ舞いするほどの。

朝顔 この霧を抜けていけるかな。

女 どこまで？

朝顔 タちゃんのいるところまで。

女 これ、かぶって行って下さい。

とレジのところにあった、透明のビニ袋を持ってくる。

朝顔 (手に取り)？

女 霧が雨になるかも知れませんか。

朝顔 ありがたいけど、奥さん。

女 あたし、奥さんじゃありません。

朝顔 ビニールに包まれるより、僕は霧に包まれて参ります。

女 あたしが差し出すピニールよ！

朝顔、行ってしまふ。女、ビニール袋をかぶって見送る。

女 (片手で、ビニールの首をすぼめる) あ、あ。

と、戻りかけてカウンターに寄りかかる。

女 くるしい——！

マスター ばかっ。(とカウンターのなかからビニールの口のところを破る)

女 (その破れたところから歌が出てくる)

酒は唇から

恋は目から

浅草は闇から

女は、袋から

霧のしのび込むドアから、寝台を引っ張る男が入ってくる。この男は、朝顔が夢の中で見た一人の腹話術師に似ている。このかわいいの現実では、この男の名は、河合と言う。引っ張っている寝台の横には、鋼鉄のし字が、寝台のしかかり、そのし字の上からピアノ線が下がって、寝台との真中、つまり寝台の上の宙にシーツを腹にかぶされた男が寝ている。宙吊りで寝かされた男が、寝台の上で揺れているというわけだ。

河合 (マスターに) おい、バーテン、俺が来たって言ってくれ。

マスター ?

河合 (メモを渡し) ここに電話して俺が来たって言えばいいんだ。

マスター 俺って誰かと聞かれたら。

河合 こういう俺だ。

マスター こういう?

河合 こういう息の人間だ。ハア。 (と息をかける)

マスター ナマグサイ。

河合 そう、ナマグサイ息の俺だと言やあいい。

マスター (ダイヤル回す)

河合 (宙吊りの男に) 何か飲むか。

宙男 デンキブラン。

河合 待ってろ、頼んでやるから。

マスター もしもし。

河合 おい、霊気ブラン。

マスター あのですね、今、その……。

河合 電気ブランだと言ってるんだろう。(と、カウンターを越えてマスターのえりをつかむ)

マスター 頼まれたから電話してんでしょ。

河合 二つのことを一遍に出来ねえのか。(とひきずり回す)

マスター (受話器に) ちょっと待って下さい。

河合 それから、ドアが開けっ放しだ。(とひきずり回す)

マスター なにをすんの。

河合 ドアも閉めてくるんだよ。

マスター 電話をして、電気ブランつくって、ドアも閉めろって言いやがんのか？

河合 できねえか。

マスター おまえ、できる自信あんのか。

河合 電話はどうした。

マスター 切ったよ。

河合 かけろっ。

マスター こんなことされて出来っかよ。

河合 新聞読みながら、トイレにしゃがめんだろ。

マスター それは、じっとしてるときのこつたる。

河合 なぜ、出来ない！ 戦争をしながら平和を願う。平和にあけくれながら、戦争の準備をする。こうして、二つのことを人類はやってるぞ。さらに、個々は趣味まで持って……。

マスター (振り切り) じゃ、お前やってみろ。

河合 (カウンターにとびのり、片足で、カップに酒を調合し、抱え持った電話のダイヤル回す。受話器を耳に) ああ、俺だ。(と片手をドアにかざす)

指先から、線香花火が落ち、念力がかかったようにドア、閉まる。

マスター ちょこざいな。

河合 (片足で電気ブランをつくりつつ) 今、ここに来てる俺だって言うてんだらう。なに？ ここに来てる俺が分らねえ。その耳に小便してやろうか。

朝顔 (ドアを開けて、顔をさしだす)

河合 閉めろっ、そのドアっ。

女 (ビニ袋をとった顔で近づく)

朝顔 すぐに行きますから。

女 (傍に来て) なにか。

朝顔 この鉢を置かして下さい。

と夕顔の鉢をさし出す。

女 これをですね。

朝顔 じゃ。

女 なぜ、夕顔の鉢を？

朝顔 ここまで、たずねてきた証しに。

女 ここまで？

朝顔 片われを。

女 それで、もう、あなたは戻ってこないの？

朝顔 やはり、今さら探すなんてことが無理だったんですから。

女 そんなことありませんたら。

朝顔 人形ですから。

女 あたしたちは皆、この都で生きる人形でしょう。

朝顔 (急に口を手を入れて吐こうとする)

河合 おい、バーテン、こんなところで吐かせるなっ。

朝顔 すいません、よそで吐きます。

河合 吐くなよっ、てめえのゲロなんか見たくもねえんだ。

朝顔 だれだって、ひとのゲロなんか。

女 いいのよ、吐いても。

朝顔 大丈夫です。酒で吐こうとしているんじゃないんです。あの夕顔が眠る夕方が吐かせようとしてんですから。

女 夕方はなに？

朝顔 後悔です。

女 しっかりして、腹話術師。あんたほど人形を思う人が悔んだら、人の腹をかりてしゃべる人形は何を話したらいいの。

朝顔 僕は腹話術師だったのでしょか。

女 今もよ。

朝顔 でも、お腹の中が分りません。

女 何か起きてるの？ そのお腹の中で。

朝顔 ごしんせつに。

女 また、来るのよ。

朝顔 そんなことがあったらば。(出てゆく)

女 また、来なくては、ダメなのよ、腹話術師。(と外へ)

ドア閉まる。

河合 終わったな。(電話に)俺だ。お前に頼まれてきた俺だ。ちくしょう、切りやがった。(と受話器を叩きつけ)この鉢の

話を聞いたばかりに。(カウンターからとび下り、鉢を投げようとする)

宙吊りの連れ 待ちな、ブラザー。

宙に仰向けになって、電気ブランを飲みながら制す。

河合 投げさして。

連れ 夕顔に罪はねえだろ。

河合 うん。

連れ 戻しな、兄弟。

河合 はい。(と戻す)

連れ それから、このナスカン外はずしてくんな。

河合 苦しい？

連れ 俺に苦しいもんなんかありやしないよ。

河合 すごいな、兄弟。(と外す)

連れ (寝台につき) ここが、眠れる町なのか。

河合 浅草だよ、兄ちゃん。

連れ いつから眠った？

河合 いつからだ、バーテン。

マスター さあ。

河合 さあからだって。

連れ さあから何年。

河合 さあ。

マスター 三十年ぐらいでしょか。

連れ 誰が眠らした？

マスター 時の流れに。

連れ それで、まだ眠るのか？

河合 町は人間かい？

連れ あそこにメダカが泳いでる。(と水の机の上の金魚鉢を見る)

河合 メダカだ。

連れ メダカがいるということは、メダカの学校もあるということだ。

河合 そっと覗いてみてごらん。

連れ 眠れる町に、メダカの学校があるということとは。

河合 おかしい？

連れ 眠りながらも。

河合 うん。

連れ 生きてる慣習は残ってる。

そこで、カウンターに歩み、ダイヤル回す。

連れ ああ、ターか？ 今、電気ブランを飲ませる店に来てるんだ。

マスター——。

河合 (受話器に身を寄せ) 俺も。

三人のトランク持った男入ってくる。

朝顔も、それを追いながら。三人の男たちは、うらぶれた腹話術師である。

### 第三章 話さなくなった人形に彼が話しかけられるものはなにか

三人の男 (トランクを足元に置いてカウンターのとまり木に座る) いつもものを下さい。

朝顔 すみませんが……。

一人の男(鳥丸) (振り返る)

朝顔 トランクに入っているのは人形じゃないでしょうか。

鳥丸 ええ。

朝顔 そちらの方も？

もう一人の男(水丸) はい。

もう二人目の男(系丸) 僕も。長年使った人形ですが。

女 (入ってくる)

連れと河合 (電話をしている)

朝顔 (鳥丸と水丸に) そちらの方のも、長年使った？

鳥丸 どうしたんですか。

朝顔 長年、あきずに？

鳥丸 商売ですから。

朝顔 そして、今は幸せですか。

鳥丸 僕らが？

朝顔 人形との暮らしが。

鳥丸 僕らが満足ならば、人形も満ち足りるのではないでしょか。

朝顔 もしも、あなたに、何もかも投げだしたい時が来たらば？

鳥丸 妻と人形が同じでしょうか。

朝顔 分りません、あなたの言ってることが分りません。

女 (水の中の机にもどって、頬杖をつく)

鳥丸 だから、人形は人形ですよ。

朝顔 もうひとつ聞かせて下さい。歌を忘れたカナリアのように、人形が、見えることはないのでしょうか。

鳥丸 そんな時は、トランクに柳のムチを入れておきます。

水丸 僕は、月夜のカイ。

糸丸 僕は、瀬戸の小やぶの一株。

朝顔 つまり、柳のムチで引っぱいたり、小やぶに捨てたり、月夜の海に浮かべるわけですが、そうして、たしなめんの  
は、人形なんでしょうか、自分の腹なんでしょうか？

鳥丸 分りません、あなたの言ってることが分りません。

朝顔 僕が、初めて、この町で夕顔を見つけた時、その人形は、歌を忘れたカナリアのように柳行李の中にうつぶせになっていました。僕を使いこなせんのかいとそいつは言ってるような気がして、抱き上げると、もう、僕を働かせるのはやめてくれと、僕もつい、人形の声で言ってしまった。

鳥丸 すると、あなたも腹話術師だったんですね。

朝顔 僕らはお世辞をしません。なにしろ、おっくうがりの夕ちゃんですから。客にや皆さん元気かいなんて言わずに、トランクから出たがらない夕ちゃんを、僕がたしなめ、ちよつとだよ、ちよつと顔出すだけだからなんて言って、なかなか、出ないところが、なぜか、これ受けました。ちよいと顔出しても、気に入らねえな、今日の客はなんて言う夕ちゃんは、そりゃ、我がままだけど、どこか愛されてもいたんです。

そして、歌わないカナリアは、いつも、僕に逆らい、毒づき、しらけた客さえも罵倒しました。

鳥丸 それは芸にはならんでしよう。

朝顔 芸じゃありません。僕らの見せるものは、四畳半のアパートからの延長でした。

水丸 あなたは人形を何とお思いなんですか。

朝顔 遠くから来た人です。ある日、その遠くからきた人は、また遠くへ帰ってゆく振りを見せました。バザー会場のステージで、それはにぎやかな喝采を受けた後、僕は、夕ちゃんを、トランクに詰め、そのトランクを置いたまま、事務所へお金をもらいに行きました。五、六分の間だったけど、トランクに戻ると、フタは開き、子供に引っぱり出された夕ちゃんが逆さまに、橋の上から、水枯れのドブ河に落とされていました。かけ寄ると、夕ちゃんは、この世で一番嫌いなのは子供だ

と言いました。その次に嫌いなのは、子供の心を持った大人だと。なぜなら、俺には成長した記憶がない。俺の正体を知っているのは、きっと俺を気味悪がる女だろう。その女は、俺への愛着と女への執着をきつと天びんにかけるだろう。そして、お前は、俺よりも女を選ぶ。少しずつ、女の目を通して俺の正体が分ってくる。そんなことになる前に、朝顔、俺を捨てろと言いました。俺は遠くに帰ってゆくからと。

糸丸 それはあなたですよ。

鳥丸 そうですよ。

水丸 人形が言ってるんじゃないでしょう。あなたがあなたに言ってるんです。

朝顔 僕が僕に話してるなら、夕ちゃんは何なんだ！

鳥丸 あなたは腹話術師にやなれません。

朝顔 僕は腹話術師でした。夕ちゃんは相棒でした。泥だらけの夕ちゃんを持って帰ってきた夜、ぼんやりしている夕ちゃんに僕は聞きました。もしも、君が遠くへ行ってしまうようなことがあったらばだよ、夕ちゃん、と。夕ちゃん、どうして、君に会うことが出来るかと。すると夕ちゃんは、目をキョトつかせながら、こんなことを言っていたように見えました。俺が遠くに行って、まだ、俺に会いたいと思うなら、遠くから来た女に会えと。その女は、俺たちの心のつながりを天びんにかけるような女じゃない。それは、俺と同じように、ガラクタの中から、お前に近づく女だと。お前の知らない遠くから来た女に会えと。それが何だか分らない。女に会えと。それが遠くか。

ともかく、そんなことがありますして、僕は夕ちゃんを探してるんです。

だから、トランクの中を見せて下さい。(手をかける)

鳥丸 見せて、それがタちゃんでなかったらば？

朝顔 タちゃんはどこかとたずねます。

鳥丸 それを、誰が答えんの。

朝顔 あなたが答えさせてくれないなら、僕が。

鳥丸 あんたも知らないことをかい？

朝顔 でも、なんとか聞きだします。

鳥丸 ……こいつは、やっぱり頭にきてる。

水丸 頭にきた、

糸丸 フクワジュツ師だ。

朝顔 アタマにはきてるかもしれないけれど、おナカにはきていません。

そう言って、腹をさす。

鳥丸 それじゃ、話してごらんなさい。

水丸 それとも。

糸丸 その腹から命を出して。

と抱えたトランク開ける。

三体の同じような人形がいる。

朝顔 (鳥丸の人形、抱きとり) 今は、何という名前で出ているの？

鳥丸の人形 〽昔の名前で出ています。 (小林旭のカセットが鳴る)

朝顔 京都にいたるときや、ナギサで、ここじゃ、昔のチヨコでか？

鳥丸 (見てられず) そいつは、たかしという男だよ！

朝顔 それじゃ、たかし、タちゃんを知らないかい？

鳥丸の人形 (口をパクパクさせる)

朝顔 どうした？

鳥丸の人形 (朝顔と同じ声で) しゃべれません。僕は、コトバを忘れたあんだですから。

朝顔 じゃ、君、言えっ。(と水丸の人形を片手でつかむ)

水丸の人形 (朝顔に操作されずに傾いている)

朝顔 カタコトでもいいから。(と背から手を入れる)

水丸の人形 (口を開け) しゃべれません。僕は、ゴラクを忘れたあなたですから。

朝顔 (その二体を片腕で横抱きにして) じゃ、君は？(と糸丸の人形をつかみあげる)

糸丸の人形 (無造作にゆすられ、目をパチクリしている)

朝顔 言ってくれ、蚊の鳴く声でもいいから。(とたてひざに人形をのせ、背に手を入れる)

糸丸の人形 しゃべれません。砂町を忘れたあんだだから。

朝顔 僕は砂町を忘れたわけじゃない。おせんべい屋さんにも、二階の大家さんにも、しばしの猶予と言ってやってきたんだ。たとえ、僕の野心が、関西へとんだって、浅草にこびを売ったって、あの東京過疎地は忘れてやしないんだ。

糸丸の人形 (首を回す)

朝顔 (首をとめ) 聞いてくれ、ザラ紙の人体! あのしばし暮らした友はどこに行ったか?

糸丸の人形 (あくびをする)

朝顔 (その口をとめ) 赤っ鼻に、どんぐり目の、何もかもそっくりなタちゃんだ。それは今、どこに生きてるか。

糸丸の人形 (目をパチクリさせる) それは。

朝顔 それは君らが隠しているんじゃないのか? 同じ顔のその群れのどこかに、君らが僕から遠ざけようとしているんじゃないのか?

糸丸の人形 しゃべれません。何かを忘れたあんだだから。

朝顔 (その何か、この男には思想ととれる) 忘れてないぞ、どんなまばゆい思想だって。

三人の腹話術師 (笑う)

糸丸の人形 (も、口を開ける)

朝顔 言ってくれ、どんなキラメキを僕がなくなしたと言うのか?! それで、タちゃんが、どんな群れに姿を消したか?!

鳥丸 もういいでしょう。

朝顔 (キツと見て) 君らが (とは人形のこと) これ以上、話せないのは分っている。あの主人に見詰められて何か言いたくても言えないのは！

あの運河に立ってる三人を見た時、トランクごと、君らを捨てるのではないかと僕は思った。ボンリと呟いたあの言葉。

「こうしてちゃ、商売替えだな」それを君らも聞いてた筈だ。死ぬぞ。あの主人と行くと！

鳥丸 柳のムチでぶってやろうか。

水丸 象牙のカイで。

糸丸 瀬戸の木株でっ。

とトランクから、柳や、バット、土くれの株を出す。

朝顔 (迫る気配に、下手の水の中に逃げて。それも、三体の人形抱え) 言ってくれ、夕ちゃんはどこののか？

鳥丸 (浅瀬の近くで) 他人ひとの人形を……。

水丸 てめえ。

朝顔 (人形たちに) 水が恐いか？

鳥丸 答えるな、たかし！ と、つい俺も言っちゃうのはなぜだろう。

朝顔 (水にひざつけ、人形に水面を見させ) もしも、捨てられるようなことがあったら、水と相性になることだ。

ごらん、この水の中に何があるのか。

いつか、運河に捨てられたらば、メダカの学校に助けてもらえ。僕は見た、水流をかき分けながら、メダカの学校の放課後を。校内を走り回る当番が、チリンチリンと鐘を鳴らしながら、腹話術が始まるよ、人形と沈んできた人の腹話術が始まるよと叫んでいるのも！ 君らが水に没す時、この僕も水に沈もう。

行くな、あの深みには。

こうして、僕らが立っていられるのは、深い水底から突き出た宮殿の塔の上に立ってからだ。そして、ひざの辺りをくすぐるメダカの生徒たち。そこで、余興を見せれば、しばしのギャラがもらえる！ それは、息という名のギャラだ。

君らが沈む時、僕はそうする。今言った僕の声を、いつまでもおぼえていなよ。それが水と相性になる術だ。

ただ僕には、水と相性になる術は分るけれども、夕方と相性になる術が分らない！ だから教えてっ、夕方の底の夕ちゃんを?!

つき合い切れずに、バシヤバシヤッと鳥丸たち、入り、頭に手をかざした朝顔を、メッタヤタラになぐりつける。

女 (水の中の机の前に座り、ゆっくりと、金魚鉢の中のメダカを床の水にこぼす)

まだ、ぶちのめしている。

朝顔、仰向けに浮ぶ。

三人の腹話術師、人形を取り戻す。

鳥丸 ひでえ目にあつたな。(と、なぜか人形に言ってしまう)

水丸 なんだか、人形を捨てる時、こっちも心中しなきゃならないような気もしちゃって……。

糸丸 しかし、こいつの混乱はひでえもんだ。

鳥丸 もしかしたら、相当に才能ある腹話術を聞いたことになんのかな。

水丸 なにしろ、薄っ気の地肌にスミ塗るような人だから。

糸丸 (浮かんでいる朝顔に) 笑うな、こら。

鳥丸 腹を、最後に撲ってやろうか。

水丸 金属バットで。

鳥丸 柳のムチで。

糸丸 瀬戸の小やぶで。

びしゃっと叩く。動かない朝顔を見下ろし。

鳥丸 (人形を動かす、人形の声で) さあ、飲み直そうか。

水丸・糸丸 河岸替えて。

とトランクの方へ。

朝顔 (立ち上りながら)

〱巷の鞭に叩かれながら

僕は何かを待っていた

なんのざまだと

かけ寄る友を

(女の座る机に手をかけながら)

〱巷の酔いにふらつきながら

きみと歌ったあの唄さがす――

女 (受けてそつと歌い出す)

〱ミラボー橋の

あの唄を

朝顔 (行きかけて、とまる)

女 〱日が暮れて、鐘が鳴る

月日は流れ

あたしはここよ

朝顔 ……誰です。

女 ……。

朝顔 タちゃんと歌ったそのうた、どうして、あなたは知ってんですか？

女 朝ちゃん、あたしです。

朝顔 分りません、僕は、あなた分りません。

女 隣りに住んでいたこんなあたしです。

振り返ると、サングラスをかけた主婦。

朝顔 (退<sup>す</sup>って指をさす)

女 ひしゃげたアパートの。

朝顔 (退<sup>す</sup>って) ああ！

女 それだけ？

朝顔 (水の中に退<sup>す</sup>って) ああ！

女 でも、悲しいです、サングラスかけなきゃ、思い出してくれないなんて。うっとうしいならとりましょか。

朝顔 (バシヤバシヤと) いえ、そのまま。

女 (つけ) こう？

朝顔 (後ずさり) ああ!!

女 お久しぶり。

朝顔 ああ。(とよだれを垂らしながらうなづく)

女 遠回りしてすみません。

朝顔 ああ?!

女 だから、のつけからアイサツすべきだったものを。

朝顔 ああん。(いいですよという意味?)

女 もっと早く気付いてくれると思ったもので。

朝顔 ああんまへん。(すみませんの意味)

女 ああ! (と頭を抱える)

朝顔 (分らず、近づき) ああ?

女 こいつにはあしかないのか?

朝顔 ああん。

女 それじゃ、もっと子音を使ってよ!

朝顔 (静かに) シーン

女 〽️日が暮れて、人は酔う

月日は流れ

僕はベロベロ

朝顔 (手を叩く)

女 拍手をしたのはあたしです。歌っていたのはあなたと夕ちゃんです。

朝顔 (叩いた手をギュツと掴んで) ええ。

女 壁の穴から、あたし、夜食まで差し入れたでしょ。

朝顔 その節は<sup>せつ</sup>。

女 いつか、その特訓を生かして、デビューするのを期待して。

朝顔 僕らは。

女 え？

朝顔 沈黙の方にデビューしてしまったんです！

女 沈黙からいつか浮上しますよ！

朝顔 もう、きらめきがありません。

女 (指さし) キラキラしてますよ。

朝顔 これは水です。

女 じゃ、この百ライターつけてっ。(シュバツ)

朝顔 (その炎の前で) 今は、この町で？

女 あなたとタちゃんが、あのアパートを去ってから、あたし、ずっと待っていたんですが。

朝顔 ごあいさつもせずに出てしまい……。

女 あたし、居ないのに、毎晩、夜食、壁の穴から差し入れたのよ。

朝顔 バザーの会場から、僕らはおかしくなってしまうたんです。

女 そんな時、なぜ、あたしに相談しないの……。

朝顔 僕らのトラブルを他人に相談するわけにいきません。それは、僕だけのことですし。

女 でも、あたしには、本当に二人いるように思えたのよ。

朝顔 その二人目はどういう風に見えました？

女 離れてはいけない友のよう……。

朝顔 ああ。 (と頭を抱える)

女 ひとが、ひとをつかまえているということは、そういうことなんだ。

朝顔 あれは、僕の声を借りた人形なんです。

女 遠いところから来た人じゃなくて？

朝顔 (何も言えない)

女 熱いわ、この百円ライター、とても熱くなってきた。

朝顔 そういふもんです！ 友だってそういうもんです。つかみつづけられないことだってありますよ。

女 つかまえてー (と灯る百円ライターを差し出す)

朝顔 (ぬれた袖でつかむ)

女 ずるいの！

朝顔 (改めてつけた炎で女の顔を照らす。そのサングラスを) それで、あなたは今、結婚されたんですか？

女 (背中ものをゆすりあげ) ええ。

朝顔 おめでとう。

女 めでたくなるかどうかはまだ分らないんです。

朝顔 めでたいですよ、お子さんまで出来て。

女 朝ちゃん。(と手を頬に引きよせる)

朝顔 結婚された方が、そんなに馴れなれしくしてはいけません。

女 あなたが去って、あたしは結婚するしかなかったんです。

朝顔 分ります。

女 まだ分っておりません。(と首っ玉をかきよせる)

朝顔 かげんして下さい。今は主婦の身なんですから。

女 人形をあやすのを見て、あたしは、あたしをつかまえてくれるのは、こういう人だとも思っていました。

朝顔 あなたをつかまえる人は、こんな気違いじゃありません。

女 あなたは気がおかしくなんでしょう。それはあたしが保証してますっ。

朝顔 でも、結婚された身で、ただ隣りに住んでいただけの男に、つかまえてなんて言っちゃいけません。

女 あたしは、結婚して、あなたに会うつもりでいたんです！

朝顔 だから、こうしているんでしょう。

女 居方いかたがどこかちがいます。

朝顔 その結婚をめちやくちやにするように、僕になにか、やらせようってんですか。

女 せっかく会えたのに、どうして怒るの？

朝顔 (百円ライターを消す) ……怒るつもりはないけれど。

女 朝ちゃん。

朝顔 はい。

女 あたし、結婚したけど、結婚してないんです。

朝顔 (背中の子を見る)

女 まるで結婚したことにならない結婚を、あたし選んだんです。

朝顔 子供が大きくなって、そんなこと言えるんですか？

女 泣き声ひとつない子が、あたしの子ですか？

朝顔 ?!

女 朝ちゃん、朝ちゃんと何百回でもあたし言います。

朝顔 あなたは、何を背負ってんですか。

女 これは人形です。

朝顔  
！

女 朝ちゃん、あたし、主婦の真似事をして、ずっと、あんたを待っていました。

朝顔 結婚も主婦も真似事ですか。

女 初めは、そうして、あなたへの思いから遠ざかろうと思っていました。でも、それが、遠回りだけど、一番、あなたに分  
ってもらえる唯一の方法だとも気付いたんです。

朝顔 なぜっ。

女 それはあなたが一番よく知っているでしょう。

朝顔 なぜ、サングラスで近づいた?!

女 それも、あなたが、一番気付いておるでしょう。

朝顔 (百円ライターをつけて、もう一度サングラスの顔を見してみる)

女 あたしを出して。

朝顔 出す?

女 それから、あたしを捕まえて……。

朝顔 (消す) もう一度聞きますが、その子は本当に人形なんですね。

女 (べそをかきながら) うん。

朝顔 それで、まさか、御亭主も。

女 聞きたいこと、大体分る。

朝顔 旦那さんです。夫です。それも人形だと言うんじゃないでしょね。

女 あたし、そんな趣味ありません。

朝顔 趣味？

女 男の人とは違いますから。

朝顔 なにを言ってるんです。

女 だから、ダッチワイフの代りに、ダッチ・ハズバンドなんか抱けません。

朝顔 じゃ、結婚したことにならない結婚の相手とは、なんですか。

女 男です。

朝顔 男でしようが……つまり、どんな――。

女 ターゆっいちと言うんです。

朝顔 他人は、それもまたタちゃんと呼ぶ？

女 あたし、あなたが忘れられない人形と同じ名の人と結婚しました。

朝顔 ！

女 向うは、そうは思っていないません。あたしが、心も体も愛してると思っています。でも、あたし、夕方にタちゃんと呼ぶその状態しか愛してはいないんです。

朝顔 つまり、あれだ。

女 簡単に言わないで。

朝顔 かりそめの夫婦というやつだ。

女 そこにさえ至っていないかも。

朝顔 でも、体は許さざるを得ないでしょう？

女 ー。

朝顔 夫婦なんだから、そこは……。

女 あなた、許してもいいでしょうか？

朝顔 ？

女 そうなっても、あなたは苦しくないですか？

朝顔 僕の判断を待つまでもないでしょう。

女 いえ、あなたの許しがなければ、動けません。

朝顔 ということは？

女 あたしたち、手をからませたこともありません。

朝顔 しかし、他人は、子まで出来たと思っただけで見るでしょ。

女 この子は、ターさんのお母さんが、早く、子供をつくれと言うので、言われて三日後につくって見せたまで。

朝顔 (バーテンに) デンキ・ブランを下さい。

バーテン いただきます。(つくりだす)

女 (ゆっくりとサングラスをとる)

朝顔 あなたは。

女 はい。(と見る)

朝顔 どうして、僕が使っていた人形と同じ名の人と結婚しなければならなかったんです？

女 いつまでも、あなたの体の半分と暮らしていたかったから。

河合の連れ(デンキ・ブランを、バーテンの代りに持ってくる)(と置く)

朝顔 (口つける)

連れ (椅子を一つ持って、二人の間に座る)

朝顔 なにか？

連れ いえ、コップが空くのを待ってるだけです。

朝顔 空いたら、言います。

連れ でも、サービスさせて下さい。(と座っている)

朝顔 話が、とり込んでいるので。

連れ でも、雨は降っていませんから。

朝顔 え？

連れ べつに、あわてて、取り込まなくてもいいんじゃないでしょか。

朝顔 (じろつと見る)

連れ 過去の洗濯物は。

朝顔 (急にそいつの胸ぐらつかむ)

女 やめて、朝ちゃんっ。(とその手にかじりつく)

連れ 分りました。あなたは強い、とても強いですよ。(と後ずさる)

女 (酒をすすめて) さあ、一杯やって、機嫌を直して。

朝顔 (そのコップはつかんだものの) 僕があなたに感謝すべきことは、酔っ払って苦しんでいた時に、介抱してもらったことだけです。窓ガラスにつんのめった音を聞き、サングラスをかけたいつものあなたが部屋にきて背中をさすりながら、どこに手を入れてくれました。それは確かです。楽になってありがたいという気持と、吐いた物を見て穴に入りたいと思う気持はあったけど、あなたとこっそり、何か秘め事を語ったこともなく、約束したこともないんです。

女 いえ。

朝顔 なにが、いえです。

女 あなたはあたしを知っていました。

朝顔 いつ。

女 いつも。

朝顔 どんな日常。

女 貧乏生活のどん底で。

朝顔 なに言ってるんだ。

女 あたしを、いつも持っていました。

朝顔 何言ってんだと言ってるんだ。

女 その、のどに手を入れてあげた時だって、あなたは言った。汚れた手をつかみながら、いつか、この手のところに帰ってくるって。自分は、いつも、背中から手を回し、夕ちゃんの舌を動かす。舌と唇のちようつがいがかわれた時も、あなたが、今、僕のものに手を入れてくれたように、人形の口に手をさし込み、かみ合うように直してやると。しかし、この今夜まで、ひとの手が、僕のものに入ってくるとは思わなかった。その手は、メスのように、闇を抜けてきた魚体のように、僕のものにとび込んだ。そして、何を直そうとしたのか、この体が人形であるかのように。もしも、また僕が苦しんだならば、僕は、その手の来るのを待たせよう。だから、もっと飲んで下さい。(とコップを押す) この手、いつでも参りますから。

朝顔 酔ってたんですー

女 それじゃ、酔ったことを信じたあたしはどうするの？

朝顔 忘れて下さい。酔った上でのことは忘れて下さい。

女 なぜ！

朝顔 ひとは、いつまでも酔っ払っているわけじゃありません。

女 いやです、忘れるのが！

と逆に、女は、酒を一気に飲んでしまう。

女 ウイーツ。

朝顔 (目を見はる)

女 まだ分らない？ あなたは、あたしに、僕は君を愛してると言ったわ。わたしは、あなたに待っていてと言った。それから、わたしは、わたしをいつまでもつかまえてと言おうとした。そうしたら、あなたは、「行ってしまえ」とあたしに言ったの。

朝顔 どこで？

女 あのひしゃげたアパートで。それを知っているのは、あなたと、壁に寄りかかった人形ばかり。

朝顔 サングラスをしたあなたにですか。

女 サングラスをしてないあたしに。

朝顔 サングラスをとったあなたを僕は見たことないんです。

女 見てたわ、いつも、あなたの部屋で。

朝顔 すると、サングラスをしてたあなたと、してないあなたと僕は一緒につき合ったともいうんですか。

女 隣の部屋で、いつも聞き耳をたてていたあたしはサングラスをかけてたけれど、いつまでも愛してると言ったあなたの言葉を聞いている時のあたしは、サングラスはしていません。

朝顔 いつ、そんな女が、僕の部屋に入ってきたって言うんです。

女 同時です。あたしたちは、いつも同時でした。

朝顔 (サングラスのない顔を見て) 思い出せない、そんなあなたは思い出せません。

女 思い出せなかったら、ビニールの城を訪ねて下さい！

朝顔 あまり変なことおっしやらずに、どうぞ、主婦に戻って下さい。(背を向ける)

女 いや！

朝顔 (カウンターの方に)

女 そうして、また、あたしに「行ってしまえ」と言うの?!

戸が開き、ターが立つ。タちゃんのもりで、肉体関係もなく結ばれたこの男は、人のよさそうな笑みを浮かべて妻を見る。

女 !

ター 帰ろう、モモ。

女 もう少し。

ター コホン、コホン。(そしてペコリと、カウンターに座る厳めしい連れにペコリと頭を下げる)

女 この子、背中でおもらししてしまったもんだから。

ター それじゃ、抱きとろうか。

女 だめよ、あなたに抱かれると泣きやまないから。

ター おしめの替えは、持ってきたんだ。(見せる)

女 それ、お隣りさんからもらったタオルじゃないの！

ター でも、お尻には気持がいいよ。

女 紙オムツが目に入らなかったの！ タンスの上のムーニちゃんか！ あんたは――。

ター ごめんよ。。

女 尻拭くもんと顔拭くもんの区別がつかないのかい！！

ター 怒鳴んなよ。(連れ見て) 叔父さん前で。

女 (朝顔に) とまあ、こんな風な生活です。そんな主婦の座にあたしを戻してもいいものでしょうか。

連れ (叔父と呼ばれた時から、ガマン出来ずに立ち、この時、視線の間に入る) こんな主婦がいるか？

女 どなた？ あなた。(とターに)

ター 叔父。

連れ どっかの家庭でこんな主婦を見たことあるか？

ター いいんだよ、叔父さん。

女 肉親が何の用？

ター 母が呼んだんだ。

連れ おお、呼んだとも！ おまえの、オイッコ夫婦は、なんだか変だと！ なにが変だと聞いたならば、夫婦の面めおとしたオママおママ

ゴトだと。三日で子供をつくったり、将来の話をしてる時に、マヨネーズで顔洗い、おぶった子が泣いたのを聞いたこともなけりや、ネンネコから顔を出したの見たことない。おら、あんな家いやだ。こんな嫁には耐えられないと、おまえのオフ

クロは言ったんだ。

ター 僕は耐えられますから。

連れ 耐えるな！ この女はな、これっぽっちも、お前のことなんか思っちゃいないよ。

ター (座って手に触れる)

モモ (そっと、その手を引く)

ター ……。

連れ (店主に) 電気ブランだ。(ターに) 電気ブランを飲んで聞け、おまえ、この女のどこがいい？

ター (考える)

連れ どこが一番忘れられない。

ター ウナジ。

連れ ハナにしとけ。

ター 足の裏かも。

連れ 顔からなんで、足元にゆく。

ター しいてあげれば、良たこともない胸。

連れ よおし、そこでだ、ハナの穴にはハナ毛があるぞ、それでも好きか？

ター (うなづく)

連れ 足のウラには、ふみつぶしたゴキブリかなんかがくつついているかもしらんど、それでも好きか？

ター 関係なく。

連れ 見たことない胸だって、ハナガミ詰めこんで、ふくらましてっかもしれねえぞ。

ター なに言いたいの。

連れ それでも好きなら人間的だ。

ター ……。

連れ しかし、この女には、お前の体のどこも目に入っちゃいないだろう。こいつはなターという名まえに嫁いだけよ。

モモ (バーテンに運ばれてきた三杯の酒の一つを飲む)

そのコップには、アメ色の濃い液体。コップは、小型。クイツ!

ター なぜ。

連れ あの男を待ったために。

朝顔 (背を向けている)

モモ (二人がカウンターを見ている間に) クイツ。(とターの前のも飲む)

ター モモ。(と振り返る)

連れ ……言い逃れが楽しみだ。

ター カゼがひどいんで。

モモ ……。

ター 代りに店に出てくれたんです。

モモ (ターの背に手を伸ばして、さする)

ター それで、これから帰るんだよね。

モモ いえ、もう、あそこへは帰りません。

ター 帰ろう。

モモ これで縁切りにして下さい。

ター その子は。

モモ 木です。

ター 暮らした家は。

モモ オママゴト。

ター 母の楽しみは。

モモ シュウトメのエゴ。

ター なぜ、そんな生活に入ってきた？

モモ 架空の暮らして、悩みを埋めよと。

ター 架空でないものはどうなんだ。それに合わせた僕らの暮らしは。

連れ 催眠術だ。

自己催眠にかかった女の！

モモ あたしは、こうしか暮らせなかった、朝ちゃんー

と立って、はっりと男の背を見る。

モモ こうして、ひとさまを傷つけながらも、あんたを待っていたんです！

朝顔 (背を向けて)――。

モモ (連れの前の電気プランを飲む。途中で、吐き気を催して) ウッー

朝顔 (さっと振り返って立つ)

モモ 飲みすぎちゃった。(と甘えるように見上げる)

朝顔 (急に近寄り、左手で、髪を持ち、モモの喉に右手をつっ込む)

モモ (ウツとのめる)

朝顔 吐かせてもらったお返しです。もう、オアイコですから、僕らに何の関係もありません。

モモ (離されて、コップを掴んだまま、水の中にひざをつく)

そして、コップで、足元の泥水をすくい。

モモ もっと飲みます。思い出すまで、この汚い水をお酒に変えても。(泥水を唇に)

朝顔 !

モモ 居なくなってしまった夕ちゃんっ、都の群れにかき消えた夕ちゃん、言ってえ。あたしはビニールの中の女だと。

朝顔 ビニールの？

モモ あなたが、封を切らずに持っていた、ビニ本の女です！

ビニールの袋をかぶってみせる。

〜日が暮れて

鐘が鳴る

月日は流れ

あたしはここよ

## 二幕

第四章 夕方への道はここなのか？

暗転、幕間はビニール一枚で仕切られ、その向うで、仲見世のほおずき市の屋台が並べられる。ビニールがとんでゆくと、ほおずきの鉢が夕方の谷間をつくっていて、その向うに売り子が立っているが、これは、腹話術の人形群である。

へおまえがさがす人形は

下町娘と結婚したよ

ほおずきのような

頬をした

おぼこ娘と結ばれて

それで、お腹がふくらんだ

ほおずきのように

割れかかり

夕方どきには

生れるよ

誰が歌うのか。口を開けているのは人形。が、声は腹話術師の太い声。それが、人形の肩越しに上ったり、下ったりする顔も見える。ネンネコで木を背負い、金魚鉢を持ち、さらに、夕顔の鉢まで持ったターが歩いてくる。その後を

朝ちゃんも、困った顔してついてくる。

朝顔 その鉢、ぼく持ちますよ。

ター 好意なんです。

朝顔 本当に、そこまでやらせる理由いわれはないです。(と取ろうとする)

ター いえ、ここはどうか。

朝顔 そんな困ります。

ター なにを言っちゃって。ここはどうか、ぼくに払わせて下さい。

朝顔 いやあ、こないだだって、おごってもらっちゃって。

ター あんなの、なんですか。

朝顔 怒りますよ。

ター ぼくだって怒っちゃいますよ、僕、怒るとすごいですよ。

朝顔 ぼくの怒ったのだってすごいですよ。だれもとめられないんですから。

ター ぼくなんか、家中のガラス割っちゃうんですよ。

朝顔 ぼくだって、電柱引っこ抜いちゃうんですよ。

ター ぼくなんか、アスファルトめくっちゃうんだから。

朝顔 ぼくだって、水道管引っこぬいちゃうんだから。

ター 引っこ抜いてばっかりいるのね。

朝顔 ともかく、それで友達失っちゃうんだから。

ター ぼくなんか神に見離されちゃうんだから。

朝顔 ぼくなんか、無神論者にあいそつかされんだぞ。

ター ぼくなんか、おならしか出ないんだから。

朝顔 ぼくなんか、おならさえ出ないんだから。

ター ぼくなんか、おならし過ぎて、町中引き回され、絞首台の方に引っぱってゆかれる夢みたんだから。

朝顔 この辺で、ともかく、その鉢、ぼく持ちます。

ター (その手をつかんで) と、まあ、ぼくら、話が弾む関係になりましたね。

朝顔 おつらいでしょう。

ター え？

朝顔 こんな僕に声をかけて。

ター かけたかったの。

朝顔 うっちゃつといてくれればよかったのに。なぜ、こんな憎い僕に声をかけたんですか。

ター 妻が愛するものは、僕も愛しようと思ひまして。

朝顔 あなたは。

ター ホワイ？

朝顔 ひよっこり、僕なんかが、現れない方がよかったんじゃないですか。

ター あなたが現われなかったら、どうなんだろう？

朝顔 こんなことにはならなかった筈です。

ター そうすると、めおとの関係なく、木をおぶう妻を見、母の前で、野菜サラダに顔をつつこむ妻を、死ぬまで見つづけるんですか。

朝顔 中年になりや、時が洗ってくれますよ。

ター いえ、女にあきらめの時はありません。

朝顔 ううむ。そこはたしかに。

ター だから、こうなってしまった方がいいんです。朝殿。

朝顔 なん殿？

ター あなたは、あの時、どうして受けてあげなかったんですか。妻が、ビニールをかぶって、ビニ本の女と言ったとき、あなたは、どうして、さっさと行ってしまわれたのですか？

朝顔 僕の部屋には確かにビニ本がありました。封を切らない一冊のビニ本が。たちやんと、腹話術の練習をしている時に、部屋のすみに転がったビニ本を、僕もたちやんもチラと見て、スケベ、スケベとお互いに言い合いました。

ター そのビニ本は、あなたが買った？

朝顔 いえ、僕はそんなもの、買ったおぼえはないんです。それは引越してくる前からあったもんです。

ター モモは、あなたが買ったもんだと思ってますよ。

朝顔 じゃ、僕が、よしんば、買ったとして、それが何なんですか。

ター あなたは、寢床で、それを見たこともあるんでしょう？

朝顔 そりゃ、まあ。

ター 語りかけたこともおありでしょう。

朝顔 ビニールの封は切ってないんです、パラパラ、めくってもおりません。

ター でも、ビニールごと胸に抱いたこともあるでしょう。

朝顔 タちゃんとけんかした時は、それにこぼし話さえ。

ター そのビニ本の本人が、隣りの部屋で生活していたら？

朝顔 ……。

ター そうして、語りかけてる男に気付かれないように、サングラスをかけ、壁穴から、自分をどうするか、ビニールの中の自分をあなたがどうするか、のぞいていたら？

朝顔 今になれば、そういうことに。

ター それで、あなたはもうだったんですか？

朝顔 え？

ター そのビニ本の女は？

朝顔 ある夜、そのビニールの奥に愛してると言いました。そうしたら、夢の中で、ビニールの袋を破って、つかまえてと手を伸ばす女の夢を見ました。起きて、それが、夢だと分り、封を切らないビニ本に「どっか、行け」と言いました。

ター でも、一度は、愛しているとビ二本におっしゃったんですか。

朝顔 一度は。

ター その一度は、サングラスをかけた女には言わなかったんですね。

朝顔 僕が愛してると言ったのは、ビ二本の女です。あの人がありません。

ター 同じなんですよ、あなた。

朝顔 いえ。

ター いえって、あなた、同一人物なのですよー

朝顔 それは分ってますが。

ター なんだろう、こいつの頭は？

朝顔 問題は、僕がビ二本の女に語りかけていた時、あの人が、隣りでそれを見ていた姿です。あの人は、自分に言われたと  
思って、顔を赤らめたでしょうか。追うんです。僕はビ二本の女に、きわどい恋を吹っかけていたんです。

ター だから、それはモモなんだ！

朝顔 まだ分っていただけじゃないんですか。

ター 分らないのはそっちだろ。いいかい、モモは生身だ。

朝顔 生身なんていやなんです。

ター 生身がいやでさしみが喰えんのか？

朝顔 僕はナマが嫌いです。ナマの母にナマの父。ナマの友にナマの人息。それでたちやんとばかり付き合ってきたんです。

ター じゃあ、じゃ、そのナマでないビニールの中のモモは、一体どういうふうに見えたんだい。

朝顔 ビニールの城に。

ター 城に？

朝顔 閉じこめられた女みたいに。

ター 股を開いた妻がですか？

朝顔 そこは。

ター 見たんだろう?!

朝顔 (ハンカチで汗をふく) ああ。

ター 見たよな?!

朝顔 三角定規で隠しました。

ター それでも透けて見えるよな。

朝顔 ですから。

ター そこばかりを虫メガネで見たんじゃないの？

朝顔 いえ、スミで塗りつぶしてありましたから。

ター しかし、裸だ。

朝顔 ビニールをまとった。

ター それにイカれて、ビニールから出てきた女を受けつけないとおっしゃいますか。

朝顔 ……。

ター ぼくに遠慮はいらんのですよ。

朝顔 ターさん。あの人は、今、どこに。

ター ビニールの城に帰ると出ました。

朝顔 ネンネコぬいで？

ター 金魚鉢もおき。

朝顔 ビニールの城はどこにあるんでしょう。

ター それを僕にお聞きになるのは、僕が、あなたに生活をめちやくちやにされたターだからか、それとも、遠いところからきた人と呼ぶ、人形のターだからなのか、どっちでしょう？

朝顔 ……。

ター 朝ちゃん。

朝顔 ……。

ター 朝やんと僕はあなたを呼びとめましたね。

朝顔 なにを言いたいんですか、ターさん？

ター 僕は、あなたが思っているターさんじゃありません。

朝顔 奥さんのぬぎすてたものを羽織っているあのターさんじゃないですか。

ター 朝やん（とメガネを捨てる）、僕は、あなたがさがしているターですよ。

と、大きなホクロをとる。

かつらの半分をバリバリとはがす。その半分、スミで塗った坊主頭が見える。

朝顔 なぜ、ターになろうとするのです?! こりにこったやり方で、ターさん! あなたは、どうして人形のターになろうとするんですか?!

ター 元々、そうです。

朝顔 ハハハ。(と後ずさる)

ター 逃げてダメです。「蠅を叩きつぶしたところで蠅そのものは死にやしない」。

朝顔 ショーペンハウエルだな。

ター ショーベンは、ハワイでシロです。

朝顔 僕とタちゃんの芸を見たもんなら知ってるよ。それを、どこからか聞きかじって、それで、タちゃんを真似てみてん  
だろう!

ター 蠅を叩いても蠅は死にません。蠅一匹を殺したにすぎないんだから。そして、また蠅がとんでくる。朝やん、あんたが  
そうして遠ざかろうと、いつでもタちゃんになれる僕が、ひよっこり、あんたの横に立つてしよう。

朝顔 鉢を持ってきてくれてありがとう。(ともぎとり、背を向けて去りかける)

ター 朝!

朝顔 (とまり) それで、僕が何と言っています。演芸会場で、人形が「朝」と僕を呼ぶ時、僕が次に何て言うのか言ってみろ！

ター タです。

朝顔 チームの名前は？！

ター 「朝な夕なに」！

朝顔 好きな哲学は？！

ター ポスト・モダン。

朝顔 ポスト・モダンで、郵便ポストをモダンにしたものか？

ター 西洋形而上学への反抗。

朝顔 おかしいじゃないか。カミヤ・バーのバーテンごときが、なんで、ハクライの学問知ってんだ！

ター カミヤ・バーにくすぶりましたが、僕は、別れたタちゃんですよ。

朝顔 最後のお前との演目は！

ター 女性とは何か。

朝顔 女性への理解だ。

ター 同じことじゃないですか。

朝顔 サブ・タイトルは！

ター 「ふしだらな女に真理はあるか」

朝顔 そのために盗み読んだ本は！

ター テキストはジャック・デリダの『尖筆とエクリチュール』中の、「ヴェールをまとった女」。

朝顔 なんだ、なんだ、その難しいもんは？！

ター 理解しきれないんで、タちゃん、きみ、代りに読んでいてくれとあんたは言った。

朝顔 言っただけど、理解出来ない僕以上にお前もアホだと思って言ったんだ。

ター 僕は、デリダ以上に理解しました。

朝顔 デリダって、カンツォーネを歌ったダリダとはちがうんだぞ。

ター それによれば、女性とは。

朝顔 乳房をつけた化け物か？

ター そう言ったのはストリンダベリー。

朝顔 ストロベリーか何か知らんけど、言ってみろ、メツキがはがれて続けられるもんかあつ。

ター 女性の中で、もっともふしだらに見えるものは、クラナツハの描いたルクレチアである。

朝顔 それがどうしたっ。

ター ヴェールをまとった裸に短刀を突きつけているそれを見てると。

朝顔 ほいさっ。

ター ニーチェにとって、真理は女性のようなものであるか、もしくは、女性のまとったヴェールの動きのようなものであるのか。

朝顔 待て、こりゃ。

ター その一枚の透明なヴェールのために、ナイフと裸は、距離それ自体である。

朝顔 分んねえよ。

ター 距離は、おのれを引き離し、遠さは、おのれ、遠ざかる。

朝顔 とめろお。

ター 遠ざけ、遠ざかりであると同時に。

朝顔 (肩つかむ) なぐるぞ。難しいこと言うとなぐるぞ。

ター 遠ざかりの遠ざかり。遠さからの遠ざかり。遠ざかりの強盗。逆に、近さのヴェールをかぶった謎であろうか。

朝顔 (抱きつき) えらいよ、えらいよ、お前は。

ター 分ってくれましたか、僕がタちゃんだって。別れた最後の夜、僕らは、ビニールのヴェールをかぶったあの女のことを

話していたんです。

朝顔 泥だらけになったきみをアパートに連れ帰った夜かい？ (と首を抱いたまま)

ター 僕らはそろそろ別れ時だね、と僕は言いました。

朝顔 ……。

ター ちようつがいがこわれて、もううまく笑うこともできないし、それに。

朝顔 それに？

ター 夜ごと、ビニ本の女に語りかけてる君を見てると。

朝顔――。

ター そろそろ、きみもナマ身の女に会わなければいけない。こんな僕といつもおしゃべりしてるようでは、いつか現われるそんなひとには愛されないよと。あなたはいいんだと言いました。でも、別れなければならぬと僕が言った以上、やはり、これは別れてゆくもんなんだと僕はさとした。

朝顔 なぜ？

ター だって、朝やん、これは僕が言い出したんじゃないんだぜ、朝やん、きみのお腹の中の声があったんだからと僕は言った。  
た。

朝顔 きみが言ったただだよ。

ター あなたです。げんに、あなたは、次の日、僕を浅草仲見世の人形店に預けに行った。それから、八カ月、僕がさとした言葉を胸に、僕から、逃げつづけていたじゃないですか。

朝顔 ちがう、逃げたんじゃあない。

ター じゃ、なぜ、八カ月も取りにこなかったんだ！（と抱きつくのを押しのける）

朝顔 タちゃん、僕は――。

ター ターだっ。

朝顔 （混乱の中で疑念はどうでもよくなる）いつも君の声を聞いていたんだ。

ター 僕の姿がないのにかっ。

朝顔 部屋の戸を開け、サンダルの音に耳すまし。

ター 僕は靴だろうっ。

朝顔 水道工事のシャベルを持ったび。

ター 肉体労働なんか似合わねえよっ。

朝顔 タ方の向うに君がいる。カラスがとんでく向うに君が待ってる。

ター なぜ、さがしにこなかった！（と胸を足蹴にする）

朝顔 （倒れて）ハハハハ。

ター なに、笑っていやがんだ。（と首を靴でふむ）

朝顔 （その足にしがみつき）もうこれでいいでしょう。

ター ハカ月だ、ハカ月の待ち賃だっ。

朝顔 ターさん、もうこれくらいで、こらえて下さい。

ター ？

朝顔 人形じゃないターさん。あなたが、僕をうらんでることは分っています。錯乱しやすいこの頭を使って、夕ちゃんになつてみせたのも。

ター ——！

朝顔 （立ち）安心して下さい。風にどんなビニールがとぼくと、僕はその人には会いませんから。

ゴオと、風にビニールの袋がとぶ。

朝顔 (夕顔の鉢を持ち、逆の方向に歩く)

どこにいる

共に酔った友

ルクレチアから遠く、はなれて

ぼくらは、謎の女と縁を切ったね

風にビニールの袋がとぶ。

タ一 (去ってゆく朝顔を見送る) ……そうじゃないんです、朝顔さん。僕はもう半分、夕ちゃんなんです。

ビニール、もうひとつ。

タ一 夕ちゃんにならなければ、モモという妻に喰い込んでゆくことができないんですから。

朝顔が去った方向から、水槽を引っ張った催眠術師がくる。引いているのは連れと書いた引田で、押しているのが河合。水槽は、一米二十センチ四方で、「は鉄だが、客に向いている面はアクリルであり、その中に、手錠をした人形

(腹話術) が、重しをつけて、沈んでいるのが見える。これは、通り過ぎた朝顔にとっても挑発的な光景だろう。引田は、聞いていたようで、出てくるとターにこう言う。「そうなのか、ター？」水槽を押している河合。(水槽にとびり、棒で、沈んでいる人形を突つつく)  
水中をフワリと人形、逆さまになる。

引田 (その人形を振り返り) こうしているのが楽しいか？

ター (水中を見ている)

引田 ひとの催眠術にかかって、それから脱出もしようとしなのが嬉しいか？

ター なにをしてんです？

引田 おまえを、してんじゃっ。

ター 僕のことなんか放つといて下さい。

引田 怒るぞ、おじさんっ。

河合 おじさんの友達も怒るぞっ。

引田 おまえには分らんだろうが、おれたちの目から見りゃ、おまえは今、こうなっているんだぞ。

ター 水はなんですか？

引田 立方体のビニールだ。

ター 手錠は？

引田 あのビニ本女との腐れ縁だ。

タ一 人形が苦しいと言わないように、僕も苦しくないんです。（と去る）

引田 あの、おいつ子を連れ戻せ。（と河合に命じる）

河合、水槽からとび下りてかけ走る。

引田もその後を。いつか、ほおずきの後ろから、鳥丸、水丸、糸丸が人形を抱いて、水槽の前に立って見ている。

糸丸 だれの持ちものか知らないけれど。

水丸 うん。

鳥丸 ひどい目にあってるな。

水丸 思い出さない？

鳥丸・糸丸 うん？

水丸 水にこうした子が浸った時、共に心中してやると言ったあの奇妙な腹話術師を。

鳥丸 浅ければ、宮殿の屋根に立っると言えるけど。

水丸 ここは水ばかりの箱の中。

鳥丸 でも、僕らの人形じゃないんだから。

糸丸 関わることもないけどね。

鳥丸 (人形に) たかし、走人をなくすと、おまえもこうなるんだよ。

長いオーバーのソフトの男が、三人の横にすでに立っている。

その主 それじゃ、おいらがその主人になりましょか。

そのオーバーのそでをつかんで、困ったような顔をした赤毛の女リカもいる。

鳥丸 おいらとは？

その主 そちらは？

鳥丸 鳥丸。

水丸 水丸。

糸丸 糸丸だけど。

その主 おいらは、今、名なし丸。

糸丸 どこのプロダクションの？

名なし丸 カミヤ・バーの。

リカ 三つ、ビニール袋とばしたら行くつて言ったじゃないの。

名なし丸 そうだけど。

リカ ビニールの巻きあがる方向とは別の方に、あの人行っちゃったんじゃない。

名なし丸 トホホ。

リカ リカ、無理に連れてくんじゃないのよ。お姉さんの方から電話があつて、そろそろビニールの城に帰りたいうちゅうやさかい、とんできたんやないの。

名なし丸 (鳥丸たちに) もう少し、お待ち下さい。

リカ いいの、いいの、関わんといて。

名なし丸 リカちゃん、ちよつと聞いてね。

リカ 開かんよ、あたし。まだ、ためらうことがあるかもしれんけど、そうしたら、首根っこ引きずってでも、ビニ城にしよっぴけって最後のビニ袋とばしたんやでえっ。

名なし丸 あれ、曇り日にせつなかつたねえ。

リカ だいたいから、ビニ本の女が、ビニ本見る男にいかれてどうすんの?!

名なし丸 それは短絡よ、リカちゃん。

リカ ビニ本見るやつって、お姉さん、どういうやつか知ってる?

名なし丸 それは人さまさままでしょ?

リカ さまざまじゃないよ。十把ひとからげて、あいつら、オナニストだよ。

名なし丸 オナニスモ?

リカ オナシスってのは知らんけど。

名なし丸 モナコ王妃の殿下だった人。

リカ 知らんわ、そんな古い人。

名なし丸 あのね、裏窓って映画に出てた女優と結婚した人。

リカ 裏窓からつれてきたんか？

名なし丸 エエガ。

リカ エエガナそんなの。裏窓から覗く女だったら、同じ、でばガメやろ。

名なし丸 あなた、聖子ちゃんの映画ばかり見てっから、そういうガサツな解釈するのよ。

リカ ともかく、あたしらはよ。オナニスト相手に商売してんのよ。そこ、しっかり、おぼえてといて。

鳥丸 僕らはどうすれば、いいんでしょう？

リカ こいつらはオナニストや。だいたいからして、お姉さんのいかれたそいつも腹話術師でしょ？

名なし丸 あたし、それ、すごく光栄に思ってるの。

リカ なんで?! お姉さんの気持裏切って、人形さがしに行っちゃったんでしょ。

名なし丸 照れてんのよ。

リカ バカこけ。それ、お姉さん、オカマ懇味のオナニストなのよ！

名なし丸 思い出を汚なくしないで。

リカ 壁の穴から、のぞいてた思い出?! でも、壁穴からずれたところでは、そいつ、自慰行為にふけていたのよ！

名なし丸 ノーよ。ぜったいノー。

リカ つまり、ビニール袋の中しか愛せないのよ。

名なし丸 としたら。

リカ 生身の女は受けつけないのよっ。

名なし丸 としても、あたしの行くところは、ビニールの袋しかないのかしら。

リカ そして、今後、イカれるような人がいたら、断じてビニ本なんか買わない人に狙いをつけてね！

名なし丸 でも、もしかして、あの人が……。

リカ まだ言ってるの。（とおでこを人指し指で押す）

名なし丸 気が変って。

リカ そんなやつやないってえ。

名なし丸 ビニールの中のアたしに会いに来たいと思ったら？！

リカ あきらめて、ビニール城のお姫さま。

名なし丸 いばら城をめぐるナイトのように、あたしをさがしたら？

リカ そういう気持ちになりたいのね。

名なし丸 誰が、あの人にあたしの居所教えるの？

リカ お姉さんて、エロの尼さんになるつもりじゃなかったのね。

名なし丸 リカちゃん、こいつ、引き上げて！

と使者に命じるように、水槽の中の人形を指さす。

リカ ?!

名なし丸 名なし丸は、こいつに思いを託して、ビニールの城に行くんだから。

リカ 思いを託すこいつって？

名なし丸 朝顔じゃなし。

三人の腹話術師 夕顔でもなし。 -

名なし丸 ちようど、おながが空いた昼時だから、こいつ……。

三人の腹話術師 なに？

名なし丸 昼顔と名付けよう。

リカ 昼顔って――。

名なし丸 真昼に春を売る女のことよ。

リカ こいつ、春なんか、売れないよ。

名なし丸 こいつの声は、あたしの声で、こいつの春は、あたしの胴体。だから、リカちゃん、引き上げて。

リカ だから、だからって。(と言いながら水槽のふちに手をかける) あたし、勝手に使われてるけど。

名なし丸 リカ。おまえのヒモと、ナシつけてやったの、誰だと思ってんだよおつ。

リカ 忘れてないけど。(と手をつっこむ)

届かない。

名なし丸 ちょっと、ブラウス、ぎせいにしないと駄目じゃない？

リカ これ、洗濯屋に出したばかりなのよお。

名なし丸 池上線のホームで、寝るところないって言ってた時に――。(とすごんで、また古いことを言いだしかける)

リカ 分ったわよ。(と台の上ののって、手を肩まで入れる)

が、振り返って、まだ、その気にならない。

リカ でもさ、お姉さん、ビニールの城にいるって、この人形にことづけするっちゅうけど、こいつ、人形だよ。それが、あのやろうにことづてできんの？

名なし丸 きつとそこは、ほら、人形の声を聞き分けるあの人だから。

リカ (三人の腹話術師に) そんなもん、聞き分けられんのかね？

三人の腹話術師 僕らが、答える前に、きつと、こういう声がとびますよ。

名なし丸 よそ見すんなっ。

リカ (肩ぐちまで入れる)

名なし丸 どう？

リカ だめ、全然遠い。

名なし丸 でも、あなた、あたしが、階段下のお盆とってきてって言ったら、はあいってとってきたじゃないの。

リカ 水があんだよ！(と怒って、ふり返る)

名なし丸 それ、水だけどき。

リカ なに？

名なし丸 たかが水だと思って、ひよいとゆかない？

リカ 80センチ届かないんだよ。30センチで、溺れる子供だっているんだよ！

名なし丸 ごめんなさい、余計なこと言っちゃって。

リカ どっこいしょ。(とやってみる)

髪入る、額もつかる、差は30センチ程になる。

名なし丸 (お尻を押し) まだ？

リカ (目と鼻までつけ) もうちよい。

名なし丸 こう？

リカ (口までつけ) あっー

名なし丸 え？

リカ (水槽の中で目を開いて、客席の頭上を見ている)

手はぶらりと、笑うようにぼおと見ている。

名なし丸 リカ?! (とゆする)

リカ はあっ。(と水から顔を抜く)

名なし丸 なにが、あんなの？

リカ 今ね、ビニールの城が見えたの。

名なし丸 通りの向うのビミ本屋じゃなくって？

リカ あれは見かけ。その背後にビニールの城門とビニールのやぐらと、ビニールの天守閣(塔)と――。

名なし丸 どれ! (と台の上ののって、水槽のふちにのりだしかける)

リカ 水にゆれるお店の向うよっ。(と尻を押す)

名なし丸 (片目をつける。髪も少し入り、顔を横にして) あっ!

リカ ねっ。

名なし丸 (片目を押さえて、台に立ち) ツケマツゲとれちゃった。

リカ ばかねっ。

名なし丸 代りない？

リカ そういう身だしなみはのりこえないとお！

名なし丸 あたし、英語は出来るけど、水はダメなの。

リカ また、英語の弁論大会で一位になったって話でしょ。でもあんた英国って水の国なのよ。

名なし丸 英語をやってる分、水泳やってりやよかつたんだけどな。（と台おりする）

リカ とかなんとか言って、（しぶしぶ台にのり、ふちに手かけ）けっきょく、あたしにやらせるつもりなんだから。

と手を入れる。

名なし丸 （お尻を持って）見てね。

リカ （おでこをつけながら）なにを？

名なし丸 あたしたちが、そこで働く時、この外から、ビニールの城が、どんなふうにそびえて見えるか。

リカ 男のためじゃなく。あたしたちのお慰めにね！

ズボオンと、リカ、水の中に頭から、腰、そして、名なし丸の手をすり抜けた足、つま先、水櫃の中で逆さまに踊る。そして、沈んだ人形の首つかむ。水中で、しばし、ビニールの城を見る。笑っている。水中で手をひらひらさせ、

そして、底を蹴って、水の上に出る。

鳥丸 みろ、たかし。(と人形に言う)お前がそうなりや、俺もそうする。

水丸 そうなんだぞ、お前。柳のムチでぶつこともあるけど、こういうことも俺はできる。

糸丸 拍手してます。人形が拍手です。

リカ、水の中から、人形を抱えて、台にとびおる。

リカ さあ、姉さんっ。

名なし丸 (ぬれた人形をつかんで)おいらは名なし丸だ。そして、お前は昼顔と名付けよう。

リカ もう、時間がないからさあ。

名なし丸 もしも、ここに朝顔という腹話術師がやってきて、お前を夕顔かと聞いたならば、僕は名なし丸のことづけを持った

昼顔と言うんだよ。そして、名なし丸と語った女が、あなたに、こんなことづけをして行った。

あ、あたしはビニールの城で待っている

真昼に春を売る店の

その向うにひるがえる

スカートのような

お城でと

コスチュームは布一枚

それも絹ではありません

肌を包むピニールで

破けば

げすな

あぶらみだけど

姫をきどって

眠っています

置いた人形を、振り返り、振り返り、リカと一緒に去る。

鳥丸 ゆこうか。僕たちには無用なこった。

水丸 歌も。

糸丸 色気も。

河合 まて、色気なしっ。

と立っている。棒を手に。

鳥丸 ほら、きた。

河合 ずいぶんと見上げた同情だな。(ツカツカ)

鳥丸 ぼくじゃないんです。

河合 なにが。(と人形をつかむ)

鳥丸 引き上げたのは。

水丸 リカちゃんと。

河合 それ知り合いなのか。

水丸 いえ。

河合 (胸ぐらをつかんで) 知り合いでもねえのに、てめえ、女の名にちゃんをつけんのか?!

鳥丸 リカと言え、リカと。

水丸 リカです。

河合 いつも、そう呼び捨ててんのか。

水丸 え?

河合 リカって!

水丸 初めてなんです。

河合 初めてなのに、気安く、リカ、リカって言えんのか。

水丸 関係ないんです。

河合 関係ないリカは、俺と、いつ関係持つんだっ。

水丸 この人の言ってること分んない。

河合 じゃ、てめえ言えっ（と昼顔を落とし、水丸の人形の足つかみとり）その女が何なんだかつ。

水丸 明治憲法（人形の名をこう呼ぶ）には話せません。明治憲法は人形なんです。

河合 そうか、てめえらは、政治を動かせない分、政治的な人形を操ってんのか。

鳥丸 参ったな。

河合 それで、動乱はいつ起こるんだっ。

ドーランがはげるほど、鳥丸のおでこに明治ケンポーを押しつける。

鳥丸 半導体が……。

河合 先端技術の半導体が？

鳥丸 ビニ本のビニールに代る時！

河合 おまえは、ただの腹話術師じゃないな。

鳥丸 いえ、腹を使うただの芸人です。いつかはただの芸人でないように思えたけど、今は、ただの腹話術師と決めました。

ただのサラリーマンに、ただの管理人、そして、ただの都に、ただの交通、これを肝に銘じた時は、巷にビ二本があふれた時でした。

水丸　すると、あのビ二本に謎があるのか。（とはせ参じる）

糸丸　あの女を隠す透明の膜に。

鳥丸　なんか、そんな気がしないかい？

水丸　それがなんだか分らないと。

鳥丸　うん。

水丸　僕らは、腹話術師になろうと決めた時の、あの時点に戻れないんだね。

糸丸　あのワイザツさを包んだ透明なもの。

水丸　そのバランスが崩れないと。

鳥丸　一生、このままで生きるんだ。（と三人、虚空を見てボンヤリする。ゆれたりしている）

河合　俺の話はどうなんだ。

鳥丸　ですから、その人形は、名なし丸という人の命令で、リカが引き上げ、だれかにコトツケしていったものですよ。名は昼顔。

そう言っていると、朝顔、去った方向とは反対の方から、夕顔の鉢持って現われ、転がった昼顔の人形を見る。

鳥丸 朝顔と夕顔の真ん中をとって、昼顔と名付けられたけど。

朝顔 (つかつか、つかりときて、抱き上げる)

鳥丸 なにを、昼顔にコトヅケしていったかは知りません。

朝顔 きみは昼顔かい？

河合 (振り返る) 無言は無言だ！

とひったくって、それを、また水槽の中に投げ込む。

朝顔 ! (沈むのを、ガラス越しに)

河合 俺のやり方に文句があるやつは前に出ろっ。

朝顔 昼顔っ。(と水槽のガラスにおでこをつけ) おまえのコトヅケはなんなんだっ。

河合 おれは猫を飼っていた。うららかなある日和、猫を抱いて竹やぶ歩いていたら、知らねえ婆アがやってきてミーちゃん、元気って言ったっけ。猫は俺がゴンちゃんとか名付けたのに、くそ婆アが、ミーちゃんと言ったら、ニヤオと鳴いて、俺よりも人なつっこく、その婆アににじり寄った。俺はそういう時のくやしさは忘れてねえ。この婆アは、うちにまで、入ってきて、つけものの上にのせたタクアン石にまで話しかけた。ゴロタ石さん、おつかれねえって。タクアン石にまで、おせっかいやかれちゃ、たまんねえから、タルを婆アの見えねえところに隠そうとしたら、婆アにねぎらってもらいてえのか、タクアン石が俺の足の上に転がり落ちた。いてえの、いたくねえのって。俺の気持は、今、そういう慙じだっ。(と朝顔のえり、

ひつつかむ)

引田 (遅ればせながら、ほおずきのしたからズイと出て) 河合くん、好きなようにさせなさい。

河合 おいっ子さんは？

引田 おいっ子もめいっ子もどうでもいいんだ。わたしは、本当は、この人に水中に閉じこめた人形を見せたかったんだから。

河合 でも、猫のゴンが。

引田 (朝顔に) さあ、何とかしなさい。

河合 タクアン石が足に落ちた時の。

引田 そういう平和な話はやめなさい。平和を願いながら、戦争を準備する。戦争しながら、平和を口にする君らしくないじゃないか。(朝顔に) さあ、何とかしたらどうですか。

朝顔 なんとかかしていいんですか。

引田 お気に召すまま。

朝顔 (河合が落した棒をひろう)

引田 しかし、わたしらは忘れてないぞ。カミヤ・バーで、君が、人形が沈むなら、僕も沈もうと言ったあのひとことを。

河合 それに、水と相性になれて人形に教えてました。

朝顔 (棒を捨て、水槽のふちに手をかける)

引田 なんとかかしていいと言ったけれども――。

朝顔 ？

引田 納得するようになってなんとかしなけりや、なにかを成したとは言えないだろう。

朝顔 歯に衣を着せるような言い方はやめて下さい。

引田 歯に衣を着せたら、どうなんだ。

朝顔 歯に衣を着せるなって言ってたんだ。

引田 なののために、わたしが歯に衣を着せるんだ。歯に衣を着せてメシが喰えるか？ 衣が喉につつかえたらどうなんだ  
っ。

朝顔 遠回しの言い方せずに――。

引田 遠回しに言わなきゃ、気がつかねえのか。この住所不定の半ちく芸人っ。手錠だ！

河合 そこね。

引田 そいつには手錠がかかってんだ。

朝顔――。

引田 わたしはね、ただ人形を沈めたわけじゃない。この人形に、恐怖の水中脱出を試そうとしてるんだ！

鳥丸・水丸・糸丸 恐怖の……。

引田 分るか、これはお前たちの人形だ。お前たちの分身だ。つまり、呪縛にかかったお前たちの今日の姿だ！

鳥丸 都が水とするならば。

引田 水の都はヴェニスに浅草っ。

水丸 手錠は？

引田 ここまで言っても分らねえのかっ。(と蹴倒す)

鳥丸 (助け起こして) 生活上の手かせ、足かせ。

引田 そうそう。

糸丸 別れた女房への、遅れてる慰謝料とか。

引田 実感ももってるよ。

朝顔 それが何なんだっ。

引田 それが何なんだだって！(と告げ口するように鳥丸たちに言う) ここまで、生きて、そのリアリティも分んねえのかっ。

鳥丸 独り身のオナニストですから。

朝顔 ぼくは反オナニストですから。

引田 そんなこと、どうやって証明できる！ 布団のしみに聞くのか？ アパートの壁に証人になってもらうのかっ。

朝顔 (水槽を見て) 求めることは分っています。引き上げるなら、手錠も外してこいってことでしょう。

引田 外せるのか。

朝顔 なんとか。

引田 どんな手錠か分っているのか？

朝顔 子供かなんかが、いたずらしたんでしょう。

引田 わたしも初めはそう思った。しかし、ながめているうちに、こいつは、自ら手錠をかけた人形に思えてきたんだ。

朝顔 ?

引田 誰も使わなくなった古い人形だ。それが、もう使ってくれるなど、自ら手錠をかけたように。

朝顔 そうかどうかは昼顔に聞いてみましょう。

引田 朝顔、おまえに、物体の心がどこまで分る？

朝顔 |。

引田 たとえ、なくした人形のターに会えたところで、物体に帰ってゆこうとする人形の心を引きとめることができんのか？

朝顔 人形が帰ってゆくなら、僕も少しは帰ってゆけます。なぜなら、夕ちゃんを僕は道具として使ったことはありません。

ある時などは僕が道具でしたから。

引田 ならば、道具としてゆけ。

朝顔 ?

引田 この水底に。

朝顔 ?

引田 沈んだ人形と同じ身分で！

と、もう一丁の手錠をとりだす！

河合　それが。

引田　恐怖の水中脱出だ！

鳥丸　やめろっ。

水丸・糸丸　朝顔。

鳥丸　脱けられっこないんだから！

引田　それが出来なければ、お前は口だけのやつだ！

水丸　地肌のスミもとけちゃうぞー

糸丸　またでたっ。

朝顔　ちよっと考えさせて下さい。

引田　手錠を抜ける手だてをか？

鳥丸　考えたって無謀だよ。

朝顔　しかし、やらなければ口だけの男になってしまうだろうし。

鳥丸　僕たちは、みな、口だけの男だよ。

朝顔　悲しいことを言わんで下さい。

引田　どうなんだ、口だけの朝顔。（手錠をさしだす）

朝顔　問題は――。

鳥丸　あの手錠……。

朝顔 メリットがどこにあるのか！

鳥丸 メリットね。

引田 この場に及んでメリットか。

朝顔 もしも、僕が溺れたら、メリットは向うのもんだ。

河合 メリットってなあに？

引田 損得。もうかつちやったとか。

朝顔 向うのメリットは、おそらくターさんの怨み晴らしだ。

引田 やんぬるかな。

河合 やんぬるかなってなあに？

鳥丸 (朝顔に) おまえのメリットは？

朝顔 僕のメリットは分らない。(頭を抱える)

鳥丸 引き上げられた人形に喜ばれるってんじゃだめ？

朝顔 とは言いながらも、僕は喜んでる人形の顔なんか見たことないんだ。

水丸 腹話術協会の日報に載るってのは？

朝顔 気違い朝顔を追放しようって書いたのはあれだろうっ。

糸丸 メリットは……。

鳥丸 きみ、なにか言いそうじゃんっ。(と糸丸の周りにくる)

糸丸 声でしょう。(水槽の人形を指さし) まだ聞いてないコトヅケの。

朝顔 それが、メリットになる声と思うか?!

糸丸 そりや、聞いてみねえと分んねえけど……。

朝顔 昼顔と名づけた人は?!

鳥丸 名なし丸。

朝顔 コトヅケしたのも名なし丸?!

鳥丸 が、いったい、誰にそのコトヅケを伝えようとしたのかは分らない。

朝顔 昼顔、それは僕かい?

水中の人形、水の中に立って、顔あげる。

朝顔 僕が聞けばいいのか?

うなずくと同時に沈む。

朝顔 手錠をかけるおっ!

と両手を差し出す。

引田 道具としてゆくんだぞ。

鳥丸 やめてくれ、朝顔。

引田 まだ、もめてやがんの。

鳥丸 コトヅケを聞くななら、こんな危ないマネはしないで、コトヅケた名なし丸を捕まえればいだろうに。

朝顔 ……。

鳥丸 そうしよう。

水丸 そうだよ。

糸丸 そうしよう。(と引っ張って離れさす)

朝顔 いつかは、柳のムチや、金属バットでふちのめした僕に、なんでこうも気を使ってくれんです？

鳥丸 そりゃ、ほんとのこと言うと、人形の声なんて、誰にも聞こえないからだよ。

朝顔 レールに耳あてて、列車の音は聞こえるでしょう。

鳥丸 そりゃ、向うから列車がくるからだろう。

水丸 そんなバカか、おまえは！

糸丸 やはり、こいつに関わるってのは、時間のムダかもしれないよ。

朝顔 あるいは、便所の前に脱ぎ捨てたズボンに、その人の姿なりが、ありありと見えることがあるでしょっ。

鳥丸 お前な、そういう発見は、人類を幸せにしないよ。

水丸 だからって、（人形さし）あの枯れ木から、伝言が聞けると思っているのか？

朝顔 でも、なにかいたたまれない。

水丸 いたたまれないものに慣れなくちゃ。

朝顔 駅の公衆便所で、一人のオカマが泣いていた。それも一つのいたたまれない姿だろ。

水丸 慣れんだよ。

朝顔 登校拒否の中学生が、制服に身を包んだまま、終点のホームで、鉛筆をけずっていた。それも慣れろと言えんのか！

鳥丸 そういうものは親に慣れさせろ。

朝顔 惨殺された永野社長の情婦が。

鳥丸 なに言いだすんだ、こいつ。

朝顔 被害者に金を返すため、アリゾナの峡谷へ砂金とりに向かった！ これにも慣れろとおっしゃいますか？

鳥丸 開拓時代なら、まだしも。

朝顔 だから、この昼顔に慣れたら。

鳥丸 慣れられる。

朝顔 いなくなつた夕ちゃんにも慣れなくちゃなりません。

鳥丸 お前は、この昼顔から、なくした人形のことを聞こうとしてるな！

朝顔 （決意して、腰の風呂敷から、水中メカネを取り出す）

鳥丸 用意してたっ。

朝顔 人形に、水に相性になれと言った時から。(つける。水中帽子も髪が乱れないように冠る)。

水丸 おおっ。

糸丸 息はどうすんだっ、手錠が外れないときの――。

朝顔 メダカを水そうに入れてください。

ターが忘れていったメダカの入った金魚鉢を指さす。

糸丸 (水槽にメダカごと水あける)

鳥丸 こいつは、メダカの学校に助けてもらおうと思ってんだ。

朝顔 そのアクアリングを背中に背負わせる。(と糸丸に命じる)

鳥丸 メダカの学校で演芸やって、息って名のギャラをもらうつもりでいるんだ。しかしメダカは二匹しかいないんだぞ。

朝顔 手錠はまだかっ！

引田 なんだか、おまえに遊び道具を提供しちゃったみたい。(ガチャリ)

とかける。

朝顔 せっかくですから。

糸丸 何か言い残す？

朝顔 民衆を呼んで下さい。

糸丸 民衆ってほどのもの、ここにいないよ。

朝顔 あそこに隠れてる人形の民衆を！

上手から、そば喰っている人形と腹話術師出る。ドンブリからそばが人形の口へ、そしてその口から長く、そばが一本、上手奥につづく。

朝顔 もっと出ろっ。

そのそばがつながる奥から、そば屋の屋台を引いてくる親爺がいる。屋台には、蠅のように、ドンブリ持った人形が腰かけている。

朝顔 着せかえ人形も、ダツコちゃんも！

下手から、そういう類いの色とりどりが、リヤカーの台に並べられて引っぱられてくる。

人形売りの男 なんのにぎわいだ、こりゃ。

朝顔 諸君っ。

人形たち ——。

ヌーと、ほおずきの裏から、ほおずきの売り子である人形のボール紙顔が上に十個つきでる。

朝顔 駅の公衆便所で一人のオカマが泣いていた。(と台に立つ) なにが泣かせているのかは知らないけれど、この世にふぴんなものの姿は数しれない。

河合 だれに話してんだ、このやろう。(と棒で胸押す)

朝顔 (その棒つかんでつづける) 登校拒否の中学生が、八王子のホームで鉛筆をけずっていた。チビた鉛筆をにぎりながら、ホームの白線に長い長い退学届けを書いていた。さようなら学校、さようなら両親、そしてさようなら、十三までのヒヨッコ人生、最後に一つ、さようなら、現われなかった友と。その友とはなんなんだ。その友とは君らじゃないのか！

引田 怒ってるぞ、民衆に。

朝顔 行ってやれえっ、八王子の彼のホームに！

人形たち、身動きしない。

朝顔 この町の（と天を仰ぐ）上にかかった曇天の雲のように、懐疑と倦怠に重く、きみらの心がふさがれているのは知っている。それは、*know*！（上手に）きみらを抱いた人間の腹に飼いならされているからだ！（下手をさし）いつか、きみらを買いに来て、あきたら放り投げる人間の子供の心を思うからだ！ しかし遠くから来た人よ！

鳥丸 ここが持論だな。

朝顔 きみらは、はるけき物体の彼方から、なにゆえにここに来た！ きみらの固く口つぐむその本当の目的は何なんだ。おもちやか、余興か！ なぐさみ物か！ ちがう！ きみらは、人間の目にまだその正体を現わしてはいない——豊田商事のセールスマンが、下町の年寄りを狙って入りこんできた時、そこに居合わせた者はここにいないか！ サギと嘘の幸福がつるむところをじっと、見詰めていた者はここにいないか。

ゴロンと着せかえ人形、落ちる。

朝顔 きみか？！

人形売り （ひろって）座りが悪いんで。

朝顔 幸せは座りが悪いか？！ 座りの悪い茶の間のペット。言ってくれ、勧誘員が長居しただけで、婆アが何百万も出したそのわけを！ 後になって嫌な奴だったというセールスマンに、婆アは、なんで、お茶づけ出した！ 答えない、きみらの代りに言っやろう。そのお茶づけは、へそでわかしのお茶づけだ！

水丸 (糸丸に) ヘそでわかつたお茶づけがなんだって？

糸丸 ヘそでわかつたような茶づけで、金と幸福願キンったってことじゃない？

朝顔 人は静かに！

いつも黙っている君たち。この欺瞞きまんの町が、いつかたいらかに沈まる時、きみらは初めて何かを言うだろう。しかし言っとくが、この偽りの町が正直になることも、新生に目覚める時も、これから断じてこないだろう。ならば！

ならばだ！ きみたちはどうして現われた！ 愛玩物以外の目的で、なぜ、遠くからやってきたんだ！ 言えっ、そこにいるシモンの人形！

シモンの人形が一体、箱の中にいる。

朝顔 おまえは、顔に似合わず、なぜ、デコボコなんだ！ ホモの爪がたてやすいためなのか！ シモン、なぜだっ。こいつ

は神か！ 池の端か!!

鳥丸 ううむ。

糸丸 今日は来てないからいいけれど……。

朝顔 答えは、僕が死んでから来るだろう。そして、僕が死ぬほどの苦しみに耐えたら、少しは聞けるかもしれない。それでも、もし聞くことが出来なかったら、遠くから来た人よ。たのむ。

僕に、デンキプランを一杯、つくってくれ。

ドブンと水槽に入る。

皆！

鳥丸 アサガオオ。

人形たち (腹話術の声で) アサガオさあん！

音楽

かけ寄る屋台引きのおやじ。人形は平然と客席見ている。

朝顔 (水中で、昼顔の手錠外して、えり首つかむ)

引田に河合、水槽の後ろから見ている。

朝顔 (人形を脇に抱えて、自分の手錠を外そうとする)

引田 いたたまれないのはお前の方だ。

朝顔 (外れない。苦しくなって人形つかみ水面に出ようとする)

河合 (竹ザオで突き沈める) 外せ、外さなきや、インチキだろうっ。

朝顔 (人形落して外そうと努める。水の中で)

引田 俺の名は引田だ。分るか、引田！ この引田に助けを求めりや、いつでも外してやる！

朝顔 (外れないので苦しくなって浮かぶ)

引田 (水槽のふちにまたがり、板のフタを持っている) 引田と言えっ。

朝顔 タちやあん。

引田 (その頭の上から出られないように水槽にフタをする)

そのフタは、内側ぴったりのもので、フタをしたばかりか、そのフタの上に引田乗って、ぐいぐいと押す。フタは水面  
ぴったりになる。

朝顔 (水中で、手錠をもう一度外そうとする)

外れない。浮かんで、ややななめになったフタと水面の間から呼吸するが、水底にゆっくりと沈んでゆく。

鳥丸 朝顔っ。

鳥丸の人形 僕がタちゃんだっ。

水丸 (水槽に人形の顔こすりつけ)

水丸の人形 僕もだ。

糸丸の人形 僕もなんだ。

小巷の鞭に叩かれながら

きみは何かを待っていた

なんのざまだと

かけ寄る友を

こう歌いながら、助けるために、引田の乗った水槽を押し倒す。(注)水で舞台がメチャクチャにならないために鳥丸たちがかけ寄る頃から、水槽の底の栓を、やはり、このままでは死んじゃうと思った河合が外す。だから押し倒したとき、きは水槽の水の量は半分ぐらいになっていけば、小屋主に、努力をしてると説明がつく。

鳥丸 (朝顔を抱き起こし) さあ、おごってやるぞ、おまえの好きな。

鳥丸たちの人形 デンキプランを!

朝顔 (手錠のはまったままの手で昼顔つかみ) コトヅケは?

昼顔 (口開く)

朝顔 え?

昼顔 (パクパク)

それは、朝顔がやっているのだ。

朝顔 え？ (と耳を押しつけつつ)

倒れてしまう。

昼顔 (ばかりが客席を見て、パクパク、パク、パクと何かを告げている)

音楽。暗転。

その音楽の前奏は、この歌のためにある。

下手にひた打つ、水がボンヤリとゆれる。

人形の屋台も、水櫂も、ほおずきも、素早く引き上げられる。前奏から歌に行っても、まだ暗転。その暗がりからモモの歌が聞こえる。

〜巷の酔いにふらつきながら

きみと歌った

あの歌さがす

ミラボー橋の、あの歌を

## 第五章 彼はいま彼女といるのに――

ボンヤリと明るくなるところに、デンキ・ブランが、置いてある。カミヤ・バーの中。昼顔抱いた朝顔が、手錠をし  
たまま、水中メガネもかけ、テーブルの前に座っている。

モモ （ハンチングはなく、コートで）

「日が暮れて、鐘が鳴る

とデンキブランをつかむ。朝顔の口に持ってゆき。

「月日は流れ

あたしは、ここに

誰かがドアを開けて去ってゆく。送り届けた鳥丸たちである。デンキブランをおごって、去ってゆく。ずっとそこにいて朝顔に付き添えなかったのはなぜだろう。なんだか、一幕のカミヤ・バーとは違うようにも見える。下手のテーブルは三つつながって、シーツを冠されてある。リカ、それに寄りかかってタバコを吹かしている。

朝顔 (ドアを閉めた音に、そちらを見て、デンキブランを、唇元くちから外す) みんなは？

モモ 後はよろしくって……。

朝顔 (水中メガネを外して、モモを見上げる)

モモ やはり、コトツケが通じたみたい。

朝顔 (人形を起こす) え？

モモ あたしなんです。昼顔と名付けて、あそこにコトツテおいたのは。

朝顔 人形に、つい関わってしまう――！。

モモ あんたを見越して。

朝顔 見越されました。

モモ でも、これしかなかったの。

朝顔 僕は、あんた……。

モモ なあに？

朝顔 そのためにですよ。

モモ はい。

朝顔 溺れるところだったんですよ。

モモ あたしね、昼顔は水槽の外に置いたの。

朝顔 そんなことは分っています。

モモ だったら、わざわざ水に入ることにはなかったじゃないの。

朝顔 待ちなさい。

モモ だって、昼顔は外にいるのよ。それを、いくら肺活量に自信があるからって、水の中から呼びかけることはないじゃないの。

朝顔 ぶん投げられたんです。

モモ あんたが？

朝顔 こいつがですよ。

モモ ……そういうことですか。

朝顔 (人形を渡し) 結果から見りゃ、あんたの毘にはまったわけです。

モモ (人形を受け取ったまま、そのコトバに) ……。 (淋しくなる)

朝顔 それで何なんです、僕に何の用があるのか、一言で言って下さい。

モモ 一言で言えば。

朝顔 こういうことは事務的に済まして下さい。

モモ 事務も。

朝顔 事務としてうけたまわりますから。

モモ あたし、事務も簿記もいやです。

朝顔 こう見えても、僕は忙しいんですから。

モモ あたしも、これから、忙しくなるんです。

朝顔 木の子供を捨ててですか。

モモ あんたとの子だったら捨てられないけど。

朝顔 早く言って下さい、何なのか。

モモ じゃ言います、これから、ずっと居て下さい。

朝顔 どこに。

モモ あたしのいるところに。

朝顔 あんたとですか。

モモ 体は自由でいいですから、面影だけでも、あたしと一緒に暮らして下さい。

朝顔 バカ言うな。

モモ 東北の。

朝顔 東北で暮らすってのか。

モモ いえ、東北の、お母ちゃんが、出稼ぎに行った父ちゃんに、正月には帰ってくんろというような関係でいいんですか。そういう関係はつくれないもんでしょか。

朝顔 僕は、たしかにアパートの部屋にころがってたビニ本のあんたに、心をうちあげました。しかし、ナマのあなたに心情を吐露したつもりはないんです。

モモ あたしには、その差がようく分らないんです。もしお分りなら、あなた、どうか説明して下さい。

朝顔 こういうことは実感で分るでしょう。

モモ その実感、言ってみて下さい。もし、胸にしみるように分ったら、おなじく、あたしも合点いたしましょうし……。

朝顔 いいですか、平凡パンチャやプレイボーイのヌードを見ますよ、こういうの、いいな、ああ、こういうタイプもと思うでしょう。

それが、いちいち訪ねてきたら、三人も四人も相手にしなくちゃなりません。だから、そういう思いはカタリ、つまり薄情けなんです！

モモ 何冊もあったわけじゃありません。あの部屋にあったのは一冊だけです。

朝顔 その一冊だって。

モモ 封も切らず、あなたは腰の辺りに紙のスカートまで、はりつけたりしてました。

朝顔 恥ずかしかったからです。

モモ あたしが恥ずかしいですか。（とオーバーを脱ぐ）

すごいヒマワリのような明るい服がまぶしい。

朝顔 ……。

モモ 朝ちゃん、あたしが、もっと恥ずかしい振舞いに出たら、どうしてくれます？

朝顔 どうもしません。

モモ どうもしないの？

朝顔 ナマのあんたですから。

モモ じゃ、ナマでなくなればいいんですね！

朝顔 (何のことか分らず、じっと見ている)

モモ (にらみつける)

朝顔 (デンキブランを口につける)

モモ ウツ！

とテーブルに頬を押しつける。

一人の客、ドアを開けて入ってくる。

リカ (立ち上って迎える)

一人の客 (下手へスタスタとゆきつき、椅子に座る)

モモ リカちゃん、(と顔を上げ)あたしのつい立て持ってきて。

リカ (下手奥のビニールを張ったつい立てを引っぱってくる)

ビニールのつい立て、モモと朝顔の間に置かれる。

モモ (ビニール膜一つの向うに)朝ちゃん、これで気楽にやって下さい。

朝顔 ?

モモ ナマのあたしと思わずに。

朝顔 まだ分ってくれないんですか。

モモ なにを分るの。

朝顔 こんなもの置いたって、ナマとして現われた以上、これから、あんたはズツとナマです。

モモ 生意気言わないでよ。

朝顔 帰ります、もっとやることがあるんですから。(立ち上る)

モモ もっとやることなんてありません。

朝顔 なにをやるかは僕に判断させて下さい。

モモ あたしは？ ここにいるあたしの判断は？

朝顔 あなたは勝手にやればいいでしょう。忙しくなるという事々を……。

モモ 助けて。

朝顔 ——。

モモ ビニールの中で苦しいあたしを。

朝顔 ……。

モモ あたしはいつもそうです。あなたとお会いしてからも、二人の間にはビニールがあって、なにか言えない、思いのたけをあなたに告げられないと、いつも気が急いでおりました。分るでしょう。このカメラバード、のっけから打ち明けられず、あの手この手で近づいたあたしを。朝ちゃん、ビニールを張った以上、ここはビニールの城です。だから、もっとくつろいでほしいんです。

朝顔 苦しいんじゃないですか？ そんな苦しいところで、僕とどくつろげってんです?!

モモ 苦しいです、あんたが去れば。

朝顔 ルクレチアだ、夕顔、安っぽいビニールの膜を張るルクレチアだ。

モモ 迷惑なひとり言はやめて下さい。

朝顔 ともかく、あんたと向い合っているわけにはゆきません。

モモ 三輪車にのった子供が転んだら、それを助け起こしたあんたじゃないですか。

朝顔 関係ない話はやめて下さい。

モモ それが。

朝顔 関係ないでしょ。

モモ 今、まさに、肩から胸を、（と服の肩をずらす）出そうとしている女を見て、動揺というものが起きないんでしょうか。

朝顔 （見て）動揺はあります。

モモ しかも、これを他人に見せたら？

朝顔 商売替えを祈るだけです。

モモ 商売替えを考えてる腹話術師を見て怒ったあんたが、あたしに商売替えをすすめるの？

朝顔 奥さん。

モモ だれの奥さんでもなかったわ！

朝顔 そうでしょうか。

モモ マヨネーズの中に顔をつけた時だって、あたしはビニールの袋にもがきながら、あんたの方に、にじり寄ろうとしただけだった。いつかフキのつくだにをあたし煮て、お昼どきにあんたの部屋に持って行ったら、あんた、パンにぬったマヨネーズを頬ばって、好物です、これ好物なんですと言ってくれたことあったわね。あの口のはしについたマヨネーズ、あたし、その時思っていました。

朝顔 もしも、その時、フキのつくだにを渡しながら、サングラスを外してくれたら。

モモ 外せなかったわ。

朝顔 自分はこういう女で、モデルになったビニ本を、あんた見てるのよって言ってくれたら。

モモ もし、言ったら、どうなった？

朝顔 僕らはもつと違っていたか知れませんか。

モモ 嘘よ、あんたはあきれたわ、そして、逃げたよ！

朝顔 でも、こんな遠回りの会い方で、互いに苦しまなくてすんだでしょう……。

モモ 遠回りしたのはくやしけれど、そこは遠くから来た女と思って下さい。

朝顔 でしょうが、ここは冷静に大人になって。

モモ 冷静にも大人にもなりたくないです。

朝顔 せまい町ですから、ひよっこり会って、こんなこと笑って思い出すこともありますよ。その時は、あなたも、ビニ本の人なんて見えないくらいに、別人になってるかもしれないし。

モモ それで？

朝顔 ビニール越しが好きならば、このビニールさわってこう言います。この封印。(とさわる)

ゆれるビニール。

朝顔 また開けられなかったよ、遠くから来た人と。

ビニールから手を離す。

モモ (ビニールを掴んで、おでこを押しつけ) いやだよ、朝ちゃん。

朝顔 (ギョツとして後ずさる)

モモ 苦しいんだよお。

朝顔 (それが分らない) ほんとに……もう。

モモ (後ずさるのを見て、顔をビニールから離す)

朝顔 これからは、マヨネーズに顔を突っ込むなんてことはやめて下さい。あれは、おかずがなくてぬっただけなんですから。

モモ 冷やかしてますか。

朝顔 冷やかに見えるなら。

モモ ビニールの封を切れなかったのは――。

朝顔 ぼくのものじゃなく、だれかが置いていったものだったから。

モモ 封を切れなかったのは、もう一つあるでしょう。

朝顔 え。

モモ 忘れられないと言いながら、それを開けられなかったのは。

朝顔 言いすぎるほど言ったでしょう。

モモ 動物の匂いが出てくるからじゃないんですか。

朝顔 ……。

モモ それが、あんたは耐えられないのよ。でもいいんです。開けてくれないければ……（と机をさわりながら奥へ）快く開けて迎えてくれないければ、自分で開けて出ますから。

と、くの字に折れた空気銃を持って振り返る。

モモ （唇には、鉛の弾が一個）

それを指先でつまみ、折った銃身の穴につっこむ。

モモ あなたが嫌いです。

バシンとくの字の銃をまっすぐ戻す。

モモ あんたが恐いほど嫌いです。あんたが、本当はあたしが嫌いなように、今では、あたしも嫌いです。ムシズが走るように。汗まみれの動物の匂いがたちこめるのが嫌なように、冷たいその目が嫌いです。

銃口をビニールを越した朝顔に向けている。

朝顔 空気銃なんか怖くないです。皮一枚にめりこむだけだし、ただこのデンキブランは、射たんで下さい。（そのカップを掴んで立ち上る）これは、人形たちにおごってもらったモンだから。

モモ そのデンキブランも嫌いです。

朝顔 じゃ。

モモ じゃしか言えないあんたはなおさらに。ずっといようと言ったのに、ずっと遠ざかるそんなあんたが。

朝顔 ずっといるなんてのが、どだい無理なんだ。

モモ できます。その服をぬがせ。

朝顔 ー。

モモ ブリーフもとらせて、ベッド代りのあのテーブルに横にさせれば、ここはヌードのポラロイド部屋。あたしも間もなく寄りそって、好きなポーズでシャッターを切らせる。

朝顔 そんなことを考えてたんですかっ。

モモ もっとよ。できた写真はビニールに包まれる。同僚から同僚、なじみからお得意さんに運ばれて、誰が見たって、あんとあたしは、むつまじく、袋の中に！ もう逃れられないでしょう。それで、ずっといることになるでしょう。

いや？

朝ちゃん。

こんなずつといるやり方、嫌いですか。

朝顔 見損わんで下さい。

モモ 見損ったあたしに声かけて、自分だけは見損いたくないって言うの？

朝顔 ー。

モモ 恥ずかしいなら目を隠します。出来た写真にマジックで。だから、こっちに入って下さい。ビニールのこっち側。

朝顔 あなたに関わったのは、夕ちゃんとの語らいが忘れられなかったからです。もしも、僕を見失うことがあったらば、遠くからきた女に 聞けと。人形が遠いところからきた人ならば、遠くから来たと思わせるような女がきつといる。それが、僕を知るだろう、と夕ちゃんは言いました。それが、この腹話術でしか生きられない僕に裸の恥さらしをやってんですか？

モモ ずつといたい。

朝顔 ハード・コアのこと言ってんだ。

モモ 死んでも、写真だけ残りたいんです。

朝顔 そっちへは行けません。

モモ じゃ、こっちから行きます。ただ、こっちから行っても、あなたにまた言いよるためじゃなくってよ。袋も開けられないその目が、あたしにはもう耐えられないから……こんなきれいな関係が息苦しいから！ もし、そっちへ出ても、あたしに声をかけるのはやめて下さい。これから、あたしは、あなたが嫌いになんだから！

プスン！ とビニールを打ち抜く音！ 弾を貫通してゆれるビニール、電気ブランのカップもはじけとぶ。朝顔の手から容器をなくした酒がこぼれる。

モモ さようなら、その腹話術師。

朝顔 ええ。

モモ 水に沈んだ人形、路地のゴミのために捨てられた人形、人形になってしまった人間の口を開かせる、噂の腹話術師になって下さい。そして、その人。

とビニールの穴を引き裂き、そこに口をつける。

朝顔 ー。

モモ タちゃんは……。

ドヤドヤと、引田に、河合、そして、四、五人の客が入ってくる。

朝顔 タちゃんは？

モモ ネンネコの中におります。

朝顔！

近づいてくる客。

モモ あなたがアパートを去ってから、あたしも、探しに探しました。

裂けたビニールの穴から顔出る。

モモ 見つけたのはあの倉庫、口から夕顔の花が咲く、あの夕ちゃんを見つけました。それを今まで隠していたのは、三人で、三体で、にぎやかに笑って会おうと思ったからです。じゃ、これで。会うときは、どこかのウィンドウで。

リカ (うしろから肩をゆりうごかし) 姉さん、仕度して。

モモ ええ。(と首をぬく) さようなら、ぼやけて見えない、そこの朝ちゃん！

パサリと引田に、ビニールのつい立て、叩き落とされる。

引田 さあ、客になってやる。カメラマンになってやるー

リカ 姉さん。

モモ はい。(と奥のテーブルに)

引田たち、ポラロイドカメラの置かれた下手にゆき、手に手をとる。

モモ (後ろ向きにうずくまっている)

リカ 脱がすよ、商売なんだから。

ジッパーを引く。

あらわになるその肌に、シャッターが切られ、フラッシュが何発か。

五、六人が、ポラを持って、下手の水たまりをかけ回る。

朝顔 (いたたまれず、カウンターに置いてある、デンキブランを一気にあおる)

また、しびれがやってくる。

デンキブランのカップから、一条の線香花火の火花が、のぼってゆく。

朝顔 (デンキブランのカップを離す)

一本の導火線で宙吊りになったカップがゆれる。  
まるで、酔った彼のように。

朝顔 (それを見上げ)

〱巷の酔いにふらつきながら

僕は かわいた喉にきく

これが おごられた

とろみの 酒か

モモ (背中を見せたまま、朝顔の近くのカウンターにうつぶす)

客たち (朝顔の前に来てフラッシュつける)

朝顔 (かきのけて花道へ)

〱巷の酔いにつまずきながら

諸君と別れたあの店さがす

そこが

人形の夜なのか

花道に倒れる。背後の舞台は暗転。

倒れた朝顔をゆり起こす男がいる。ネンネコなど背負っていないター（モモの夫の）である。シュツと手持ちのキリ吹き器をだす。

ター アサガオさん。

朝顔 （顔あげる）霧の中にいるきみは？

ター 霧の中のターです。（シュツ）

朝顔 周りでのぞいている人たちは？

ター 椅子に座った通行人です。

朝顔 諸君は？

ター みな諸君と思って下さい。

朝顔 ああ（とひざたて起きる）、諸君、今は何も言うことない……。

ター 手錠をかけたまま行っちゃったと聞き、叔父から鍵あずかってきたんです。

鍵みせる。

朝顔 ネンネコは？

ター あれね。

朝顔 タちゃんが入ってるネンネコだよ。

ター もうすぐ店につくでしょう。

朝顔 そんなこと言って、きみは、ネンネコ、ネンネコまっしやりませと道路におっぱりだしたんじゃ——。

ター バーテンのおじさんに預けたんです。

朝顔 ネンネコは君らのもんだ、しかし、中にいるのは僕のタちゃんだ。それをまるごと預けるってのどういうことだ？

ター ちよっとうごかないで下さい、手錠を外しますから。

朝顔 タちゃんはどうしたんだ、きみがなろうとしたタちゃんは？

ター 僕はもう完全にタちゃんです。

朝顔 完全には見えないね。

ター コホンコホン、こうして、あなたがしくじるのを見てから、余計に、僕こそが、この町に去ったタちゃんだと思えてきました。

朝顔 なに言ってやがんだ。

ター あなたに、もう諸君と語りかける資格はありません。あなたは遠くからきた女に手をこまねいて、遠くからきた人形をも失ったんですから。

朝顔 女と人形はちがうんだー

ター では遠いとは何なんですか。遠いものを求めたあなたの心は何なんですか。もしかして、いなくなったタちゃんは、あ

なたにそれを確かめようとしたのかも知れません。いや、そうじゃない、確かめようとしたのは女です。こうとなれば、人形も女も同じですから。これは、そもそも、物と女にけじめがあるかの賭けでした。あなたの目を通して、けじめがつかなかったものが、この一めぐりの旅の中で、はたして、当初の思いとそっくりそのままでいられるか。あなたは人格のない二本の女に声かけた。そして、沈黙の人形にも声かけた。そのように、あなたは、物と女を一つのマナイタに置きました。モモが恋をしかけたのはそこです。

人形を愛するように、モデルの自分をかきくどくあなたを見て、モモは——、モモという諸君の一人は、あなたに一度、身をゆだねてみようと思ったんです。

あなたは知っていますか。

人形をとり来なかったハカ月、たびたび、この町に通ったモモが、あなたの声をまねて、倉庫の奥にこまった夕ちゃんに、もうすぐ来るよ、きつと来ると声かけたのを。一度、倉庫を整理すると言った主人に、モモは、あなたに恨まれることを承知で、あの夕ちゃんをおぶりました！ 行きなさいー（と手錠を外す）あなたは、その人形に再会するでしょう。遠いところからきた人と会うでしょう。しかし、遠いところからきた女を失いましょう。あなたがつかむものは、そういうものです。行くんです。ただ（と舞台面には霧をまき）こちらからはゆけません。霧の晴れたところから行くんです。

朝顔 （花道を客席後部の方へ後ずさり）君は？

ター コホン、コホン。

朝顔 これからも、この町ですか？

ター だれもとりにこない夕ちゃんとして。

朝顔 そんなことないですよ。

ター だって、僕は、まだ誰にも愛されていないタちゃんですから。（と咳こみながら、膝をつく）

朝顔 （背を向ける）

闇の中でシェーカーの音が聞こえる。閉店時のアルバイトは終わったのか、きちんとした店の中が、ボンヤリ見えてくる。

モモ （テーブルにうつ伏しながら顔を横に向け）

酒アルコールはくちびるに

恋は瞳まなこで

浅草は、宵のくちから

女は、閉じた袋から

背中にネンネコ。金魚鉢もある。

カウンターには、鳥丸、水丸、糸丸がいる。

バーテン モモちゃん。

モモ へ？（と顔を上げない）

バーテン できたよ、カクテル。

モモ だれの？

バーテン この三人のお客さんの。

モモ （立ち上る）

バーテン すいません、おっくうがりで。（と鳥丸たちに言う）

モモ （カップ三つを鳥丸たちにすべらして）どうぞ。

鳥丸たち （頭を下げて）――。

モモ 手のばしゃ、とれんのに。

バーテン モモちゃん。

モモ まだなにか。

バーテン 胸のジッパー外れてる。

モモ （鳥丸たちに）いいよね、これくらい。

鳥丸たち（微笑する）

モモ （バーテンに）笑ってる。

バーテン 笑われてんだよ。

モモ 気をつけます。

バーテン それから、ネンネコ、いかげんにとらなきや、だめだよ。

モモ これは……。

バーテン (鳥丸たちに) 子供なんか、いないんですよ。

モモ 今日いっぱいですから。

バーテン 今日いっぱい、いっぱいって何ヶ月も言ってるから。

モモ でも。

バーテン むさくるしいんだよ！

モモ しゅいません。でも。

バーテン なんだい。

モモ これ、外したら、あたしも、ここ失礼しなくちゃなりませんから。

バーテン じゃ、今日までの、精算しろってのかいっ。

モモ (手を振って) お金はいいです、お金なんて。

バーテン 金がなくてやってゆけんのか?!

モモ 息してりゃ。

バーテン こうなんですよ。

モモ (フキンでカウンターを拭き) ほんとに、こうなんですよ。

朝顔 入ってくる。ドアの入口から霧もわあっと。

モモ (つつつと逃げるように、下手のテーブルにゆき、背を向け、ポケットから何かをとり出す)

朝顔 その、ネンネコの中のもの……。

モモ 分ってます。

と、何かを口にくわえて、下手の(テーブルのあるところ)その水の中で、ネンネコの帯を外す。

朝顔 長い間、預かっていたいて。

モモ いいえ、勝手に。

とネンネコごと、テーブルに置く。

ネンネコをとった姿は、あの明るい衣裳だ。

朝顔 しばらくだったね、夕ちゃん。(と抱きあげる)

モモ (その人形をじっと見る)

朝顔 (人形の背の穴に手を入れる)

パツと開く。

モモ  
！

朝顔 (口から出た夕顔を見て) これを夕方に咲く花と思っていただけけれど、今ほどその夕方を強く感じることはありません。  
モモ (口にくわえていたビニールを自分の顔の前にかかげる)

そのようにして他人としてしか会わないと言ったからだ。

朝顔 いろいろ、ごやっかいかけました。

モモ (ビニール越しに、いいえと言えずに頭を下げる)  
朝顔 なにも、できませず。

モモ (頭を下げる)

朝顔の足許にビニールに入った何かが浮いている。

朝顔 (拾う)

それは、ポラロイドで撮られたモモの裸である。

モモ (あわてて、片手でとり返し、うしろに隠す)

朝顔 このまま、帰ってしまうのも、なんですから、デンキブランを一杯、おごらせて下さい。

モモ (首を振る)

朝顔 (くどい) タちゃんからのおごりと言ってもダメですか。

モモ (エライ。首を横に振る)

朝顔 じゃ、これで。

モモ (うなづく)

朝顔 (ゆきかける)

モモ (じっとしている)

朝顔 (振り返って) そこは、塔のてっぺんなんですよ。

モモ ?

朝顔 あなたの、今、水の中に立っているところです。あの人たちの人形をつかんで、僕が、そうして立っていられるのは、深い水底から突き出た宮殿の塔に立っていられるからだと言ったところですよ。それも、いなくなったタちゃん、さがして、気が荒れていた時の話です。なぜ、あんなこと言ったのか、今じゃ、なんだか気がしれません。メダカが泳ぐ浅い水たまり

を見ると、平静な気もとり戻し、ずいぶん、馬鹿げたことを言って皆さんを、てんてこまいさせたことが恥ずかしくも思います。

モモ いえ、ここは、やはり、塔の上です。

朝顔 激情が。

モモ え？

朝顔 ぼくへの激しい、憤りが、そう見せんですか。

モモ あなたを怒ってなんかおりません。

朝顔 じゃ、過ぎたでまかせのむしかえしはやめて下さい。

モモ きらめきで。

朝顔 なんのきらめき。

モモ いつも放ったきらめきでのぞけば、ここはやはり塔の上です。

朝顔 だれが見たって浅底ですよ。

モモ ちよいと片足のばせば、もう一つの塔にもさわれるわ。

朝顔 なんの塔です。

モモ 水面すれすれのビニール城の……。

朝顔 僕には水しか見えません。

モモ まるで薄い膜だから。それが空気を吹きこまれて、水の底から堂々とこの足元にそびえているわ。それに足をかければ

(片足を移動させ) 斜面をすべって、深みに落ちて。

と浅床の水にひざをつく。

朝顔 やめて下さい。(と起こしかけ) もう、そんなたわごとはやめて下さい。

モモ 朝ちゃん……空気銃を向けてごめんね。

朝顔 当たらなかったんですから。

モモ 当てることもできたんです。

朝顔 さあ。

モモ さあって、ゆくとこあたし、ないんです。その夕ちゃんを渡したら、ここもさよならすると言ったけど、あたし本当は……。

朝顔 あのアパートに帰ればいいじゃないですか。

モモ あんたはんは？

朝顔 僕も隣りで。

モモ タちゃんど？

朝顔 差し入れ持って特訓します。それで、差し入れ持ってくるあなたは、もうサングラスをかけることありません。  
モモ ナマでね。

朝顔 新聞紙もかぶらず。

モモ でも、その前に…（と後ずさる）

朝顔 ？

モモ （さらに後ずさり）塔が沈むわ。

朝顔 そちらはちよつと沈んでますから。

モモ だから朝ちゃん。

朝顔 ……。

モモ 先に行つてて。

朝顔 あんたは？

モモ あたしは、あんたを連れてけないし。（と後ずさる）

朝顔 どうしたんです、なにを後ずさっているんです！

モモ 嫌いと言つたあんたを連れてけないし。

朝顔 モモッ。

モモ これから、まだすることがあるんです。

朝顔 することをしようつて言つてんだらうー

モモ 朝ちゃん、あたし、まだビニール城に通うんです。

朝顔 いつつ。

モモ 毎晩、これから。

朝顔 どの。

モモ この下の。

朝顔 なんだ、なにを言ってんだ。

モモ 水に突きでたビニール城の。

朝顔 (また後ずさる！)

リカ、何人かの客と、ドアを開けて入りかけ。

リカ 姉さん……。

モモ (見る)

リカ 今、いい？

モモ うん…… (と言って、朝顔を見る) じゃ。

開いたドアから忍び込んできた霧が、スツとモモの方に流れる。

モモ 引き金を引いた空気銃のせい、ビニール城からそちらの世界には、いつも、米粒ほどの穴が抜けてて、どんなにここ

に閉じこもろうと、霧が一筋、水を抜け、塔の壁をくぐり抜け、こうして、あたしの周りにただよいだします。

ドアの向うから近づく霧よりも先に、しゃがんだ水の中から、一条の煙がゆったりろ上る。

モモ、それに手を近づける。

モモ 行って。あなたの姿が見えずとも、この霧の向うにあなたはいると、あたしはいつも思っているから。

そう言って立ち上る。

五、六人の客、朝顔の視線をさえぎって、フラッシュをたく。

モモ (霧の奥に後ずさる)

カメラを持った客 (フラッシュをたきながら、霧の中にまぎれる)

朝顔 モモッ。(と追う)

つまずいて水の中に倒れる。ピューとドアの向うから風が吹き込む。散る霧。モモも客もいない。

朝顔 (目でさぐり) 居なくなったモモも追い、このカミヤ・バーには別室があるのかと、壁を見つめたが、そこは、改装も

しないドン詰まりだった。カウンターの向うでは、何気ない顔をしたバーテンがシェーカーさえ振っている。

よもや、この浅底のビニールの城に去ったわけでもなかるうと、つまづいた切れっぱしを、つかみあげると、水よけのビニールがどこまでも長く、床の上をおおっている。

立ち上って、たしかにビニールの（透明の）シートをつかみあげている。

朝顔　これが、ビニール城の三角屋根か。そう思って、さらに引っぱり上げると、水は高みから低い方へ流れて、ビニ本が一冊ただよかった。

浮いているビニ本。

朝顔　それを拾えば客になる。それを抱けば、昔の部屋に戻ってしまうと、後ずさり、「デンキブラン」と僕は言う。

バーテン　（スツとデンキブランをカウンターに差し出す）

朝顔　（抱いた人形をカウンターの止まり木に置き）これでいいんだよね、夕ちゃん。きみに会えただけでもよかったんだよね。

夕ちゃん人形　――。

朝顔　答えない夕ちゃんと一緒に諸君の声も消えてゆく。

ピューと風穴を抜けるような風音。

朝顔 (振り返り) そこか、モモ。

その風穴から、苦しいと言っているのか、モモ！

もう一つ、ピュー。朝顔、カウンターに置いてあった空気銃を掴んで虚空に向ける。

朝顔 どこなんだ、僕が訪ねる、その城は?!

引き金をひく。

つんざいてゆく音。

一発の銃弾は、さぐるようにいつまでも。

タちゃん人形 (ゆっくり、口あける)

流れ落ちるビ二本。

底本

「悲劇喜劇」第六十九卷 第五号 二〇一六年九月号  
早川書房

(幕)